そーして見れば釋尊御止の御言ばを添へ玉ひたのは。未造業の方に付き。又觀經に彌陀の攝取を説き玉ふは已造業の方に寄せてと。こゝ申しても御分りにくかろふ。今一つ低き喩へを出せば。此の牡丹の花ちぎるな此の葉を取るでないぞと。頑是もない子供に聞せるは。折らせまいちぎらせまいと言ふ心ろより聞せる如く。彌陀の子とし釋迦の弟子として。浄土に引き越し諸佛勝りの佛けになる身分を。五逆罪は造るな謗法罪は侵すなと。口喧く御聞せになるは。重き罪を造らぬ先きの御用意。一口に言へば他力信

心の花を持ちし身に疵が付けともないと言ふが抑止の御異見と申すもの。然るに頑是なき子供が。大切な花とも知らず。大事な葉とも辨まへず。花もちぎり葉も取りた後なれば致方があるまい。其徒らする子供程可愛が親の慈悲。重き五逆の罪とも知らず。恐敷き謗法の咎とも辨まへず。山より高き罪み。海よりも深き咎を侵せしものは。如何遊ばすか。そト言ふ徒ら者程不便可愛が彌陀の慈悲。泣く子を抱て乳房を與るが如く。必墮無間の泣聲上げた私を。心光照護と懷き上げ。六字の乳房を含せ玉ふが彌陀の

攝取。依て唯除とは單に淨土へ行けぬと言ふことではない。罪の重きを知らせ。廻心懺悔をさせて。送り屆けよふと言ふ御意である。渡さぬは渡そふためのの橋普請。橋普請の最中に。コノハシワタルヘカラスと書たる立札は。渡さぬためではない。橋を直して。そーして渡す爲めである。唯除五逆と淨土まいりは出來ぬぞやと。抑止の高札立て玉ひたのは。全く淨土まいりをとめ玉ひたのではない。改悔懺悔の橋を掛け。そーして彌陀の淨土へ渡してやろふと言ふ御腹在ての仰せごと。其釋尊の御腹を丸出しに遊

ばされたるが中興上人の御言。我身は惡き徒者と思ひつめて。深く如來に歸入する心ろを持つべしと。そこを今此の御歌に『ツミフカク如來ヲタノム身ニナレハ』と。善人目當の本願に非ず。惡人正機の本願なることを知らしめ玉ひたものと頂かねばならぬ。依つて第十八の願文に向へば。設我得佛より不取正覺と言ふ迄。七句二十八字は彌陀の攝取と拜れます。唯除五逆誹謗正法の八文字が釋迦牟尼佛の抑止と頂かれます。釋迦牟尼佛も此の大經御演説のときは。何つもの釋迦ではない。大寂定に入り玉ひ。身口意

の三業全く彌陀と異ならぬ相たと成ての御演説。そーして見れば二尊一體の大悲より。我人を御育て下され。自力の療治の出來ぬ大病人を。他力の御療治法に御任せ遊ばして。即得往生の本願せしめ玉ふ御意ろである先づ。

第二十一席

初の御歌に『ホトケヲタノム』とあり此の御歌に「如來ヲタノム』とある。ホトケと言ふも如來と言ふも同じこと。是れは本願名號に離れざる所歸の體を

擧げさせられたもの。又上みの御歌には『タノムコヽロ』とあり此の御歌には『タノム身ニナレハ』とある。上みは信心決定の相たを讀むとあるゐへ心ろの詮義となり。又此の御歌は入正定聚必至滅度とあるゐへ體だの詮義となります。時に爰に不審の立つと言ふはたのむと言ふことを教へ玉ふに。罪深くと言ひかけ玉ふは如何と言ふ不審。是れは玄義分に諸佛の大悲は苦あるものに於てすると言ふ處で。惡人正機の本願女人目當の佛意なりと言ふことを御知らせなされた處ろ。そこで大經に十方衆生諸有衆生と

御喚掛けに成てはあれど。此れを觀經に移せば。下々品には造惡の機類が正所被に御出しなされてある。其造惡の機類は臨終に及び火車の迎ひを受け。地獄の獄卒に追立てられ。未來遁るゝ方なき一生造惡の大罪人。そゝ言ふ極惡人の助かるは只南無阿彌陀佛の一行なりと御說きなされてある。依つて所說の願意も能說の佛意も爰に在りと。釋迦彌陀二尊一體の奥の手を掘出し玉ひて。罪深く如來をたのむ身になればと仰せられたものと腹を据へて置て。今一つ御相談申度きは。初めの御歌にも後の御歌にも惡人と

言はず女人と出さず。此の御歌に限て罪深くと。惡人を御喚出しに成たは如何と申せば。此れには深き謂の在る處で。先づ初めの御歌に『マコトノノリニカナフミチナレ』又次の歌にも『ノリヲキクミチニコヽロノサダマレハ』と前後の御歌に道と言ふ字が出でゝある。そこで此の御歌に道と言はずに『身ニナレハ』と仰せられたは。其道を通行すべき人柄をあげ玉ひたもので。罪の深き身なれども。彌陀をたのめば此の道が通行出來るぞよと御知らせなされたものである。時に道にも色々在て。馬車は馬車の通

行する道があり滊車は滊車の通行する道がある。今此の道と言ふは如何なる道ぞと言へば本願一實の大道ぢや。其大道を通行する人柄は。誰ぞと言へば。一生造惡の惡人である。そんなら惡人が惡人の成りで通行が出來るかと言へば。そーでない。本願を信じ彌陀をたのめばこそ正定聚となり。大手ひろげて通行ができる。そんなら本願を信じ彌陀をたのめば已前の相たと變りますかそーでない。身は曠劫來貪瞋煩惱抱たへ儘で。信德の用らきとして正定聚の仲間入り。初地の龍樹に同じくして。本願の大道を蹈

みはづさず。極樂淨土迄一直線に通行が出來ます。即ち御傳鈔に『難行ノ小路迷ヒ易キニヨテ易行ノ大道ニオモムカントナリ』とあり。又宗祖大師は本願の大道とも信心の白道とも仰せられてある。是等の御文を以て拜見せば。『マコトノノリニカナフミチ』とあるも『ノリヲキクミチ』とあるも。聖淨二門に配當せば。難行道を捨てゝ易行道に趣くべし。淨土門中自力他力を分別せば。十九二十は萬行の小路。第十八願こそ本願一實の大道である。其本願の大道の飛び出たは誰ぞ。俟弱怯劣の菩薩卽流轉輪廻の我

等である。そこを事易らかに『ツミフカク如來ヲタノム身ニナレハ』と仰せられたもの。此の『身ニナレハ』と言ふ。身と言ふ字が。現生不退を顯す一字千金の價ひ在る文字で。上みの句に望むれば正定聚の身と言はれ。下の句にかくれば必至滅度の證を得る身となります。然るに二帖目の御文に『我身ハ極惡深重ノ淺間敷モノナレハ地獄ナラテハオモムクヘキカタモナキ身ナルカユヘナリ』とあり。又三帖目に『不善造惡ノ身ナカラ極樂ノ往生ヲトクルヲモツテ宗ノ本意トス』ともあり。一方は罪の深き方から

地獄に落つべき身と言ひ。一方は信力の強き方より極樂に往生すとの玉ふ。身は一つなれども位ひ取りが違ふ。爰が機の深心と法の深心との分齊である。觀經に五逆十惡具諸不善と說き玉ひて。我等が身口意の三業の所作。みな此れ地獄の業因より外はない。和語燈錄の中に『無始ヨリ貪瞋具足ノ身ナルカユヘニ永ク煩惱ヲ斷スルコトカタキナリカク斷シカタキ無明煩惱ノ心ニテ斷セントスルコトタトヘハ須彌ヲ針ニテクタキ大海ヲ芥子ノ杓ニテクミツクサンカコトシタトヒ針ニテ須彌ヲ碎キ芥子ノ杓ニテ大海ヲ汲

ミックストモ我等カ煩悩惡業ノコヽロニテハ曠劫多生ヲ歴トモホトケニナルコトカタシソノユヘハ念々歩々思フト思フコト三途八難ノ業寢テモ覺メテモ案シト案スルコト六趣四生ノキツナナリ』と仰せられて。吾れ等が心の底を鏡にかけた樣ふなる御釋である。元祖の御言に『五刼ノアイダオホシメシサタメタル本願他力ノ船筏ニ乘リナハ生死ノ海ヲ渡ランコト疑ガヒ思召ヘカラス』と在る。石は水に沈むべきものなれども其石の沈ぬ法がある。船や筏に乘せたら沈むまい。我等凡夫は必ず生死に沈むべき身なれ

ども。沈まぬ法がある。他力の願船に乘じたら沈むまい。玄義分に『言弘願者如大經說一切善惡凡夫得生者莫不皆乘阿彌陀佛大願業力爲增上緣』と釋し玉ひて三々九品九々八十一品。機の善惡を論ぜず。兼て企てたる自力の計ひを捨てゝ。本願他力にすがりなば。必墮無間の身が必得往生と轉ずるは。偏に第十八願の御手柄と申さねばならぬ。生き羽を持つ鳥でさへ風の力を借らざれば。高き空らに昇ることが出來ぬ。況や竹と紙とで造へた鳶は尙を風の力が入る。風無くして子供が鳶を昇せなば。電信の線や木

の枝にかゝり破れて仕舞。智徳兼備の聖者ですら他力をたのまずば佛果に至られぬ。況や極惡最下の我人。他力をたのまずば往生はかなはぬ。他力の不思議をたのまずして往生を望むは。風無くして鳶昇せをするごとく。三途の電信線るや。生死の山路の林にかゝり。必墮無間と破れて仕舞。今一つ御文の御手を拜借せば。『サテハ我身ノホトケニナランスルコトハナニノワッライモナシ』と。安く佛になると聞せて。そーして次に『アラ殊勝ノ超世ノ本願ヤアリカタノ彌陀如來ノ光明ヤ』と。本願光明ニ他力を出

してある。加樣に頂て見れば。茲に至て闇き心ろの中に向ふた相談や。腰の立ぬ自力定散への協議は全く無用であつたと夢醒て。他力本願にすがり奉れば。往生一定と大安心に住せます。そーすれば起居動靜攝取光明の中で。心ろ丈夫に念佛が出來る筈づ。

第二十二席

『ツミフカク如來ヲタノム身ニナレハ』とは入正定聚の益。『ノリノチカラニ西ヘコソユケ』とは必至滅度の益である』自力の足で正定聚迄進むには。初地

の龍樹に肩を并るまで骨折らねばならぬ。他力本願のありがたさは。善知識の言の下で歸命の一念發得するなり。一大阿僧祇劫の修行を滿足して。正定不退の益を蒙る。そこを『ツミフカク如來ヲタノム』と仰せられた。此の『ツミフカク』と言ふところが。機の眞實を喚び出し玉ひた御言で。深き罪みを淺める世話もなく。淺き心ろを深める造作も入らず。生まれ付きの地金の儘と言ふことになる。今一つ言換て見れば。地獄より顔つきだしの儘で彌陀たのめと教へ玉ひたことゝなります。諸佛如來の御智慧でも

量り知ることの出來ぬ氣高き佛智を。黑ろ煙り捲上がる程恐ろしき此の心ろへ頂て見れば。いよ〳〵地獄より外に行き場のなき奴と見限られます。爰が機の深心。諸佛如來を泣せた程の横着物を。此の儘。助け玉ふは彌陀一佛と信じたてまつる。爰が法の深心と申ことになる。依て此の御席に於て。機を信じ法を信ずる。二種深心のことを暫く御相談に及びます。先づ此の二種深心と言ふは。善導大師散善義に。名高き三心の御釋がある。其中第二の深心釋の下に出でゝ。機實法實の上に付て起つが此の二種深心と

言ふもの。機實とは機の眞實のこと。法實とは法の眞實のこと。此れを御經の方に配當すれば。法の眞實は大經に說き玉ひ。機の眞實は觀經に說き玉ふ。依て大經上下二卷は開法門にして。弘願眞實たる彌陀を顯す經。先づ上卷は光明で始つて光明で攝めてある。下卷は名號で始つて名號で疊んである。光明で無明の闇を破り名號で志願を滿足せしめ我が淨土へ迎へ取らずばおくまいとて。十刼已來御首の延び上るほど。待ちづめ喚びづめ念じづめの彼尊の御腹在り丈けを寫し出し玉ひたが大經上下二卷である。

此の大經の法の眞實を受くる人蒙る機は。何なる人であるか何なる機であるかと言へば。爰が機の眞實を說き玉ふ觀經で分ります。此の觀經は攝機門と申して。經の序分に一代教を化前序とし。聖道一代の機を淨土門に引入して。韋提の請ひに應じて。廣く淨土の法門を說き。定善の機より散善の機に移り。散善の中にも善人より造惡の機に移り。其の經の頓んとおんづまりは。要門自力を捨てしめ念佛の一行に歸せしめ玉ふ經で。一口に申せば。一生造惡の惡人。鬼の兩手を美事に打切るは只南無阿彌陀佛の一

聲に在ると説き玉ひてある。そーすれば諸行自力の捨り場が機の深心。念佛他力と持ち變へた場が法の深心となります。依て此の二種深心は權より實に入る攝權の方で立つ。一口に結べば闇き心ろに向ふた相談やめて。明るき佛智に夜が明けた。そこが二種深心と申すもの。依て善導大師は要門自力と弘願他力と相對して深心を御釋なされます。所謂觀經の序題門に『娑婆化主因二其請一故卽廣開二淨土之要門一安樂能人顯二彰別意弘願一』と仰せられて。此の觀經の上では定散二善三福九品と階級が分れて。定善は勝れ散善

は劣ると勝劣が立ちますなれども。夫れば觀經の顯説で自力の上に取てのこと。今弘願の一法より此れを言へば諸行を捨てゝ念佛の一行となり。機類は九品と分れても。九品みな唯凡と判じ玉ひ。宗祖大師は觀經定散諸機は極重惡人唯稱彌陀と勤勵し玉ふと釋せられた。依て上中六品の善人も下三品の惡人も己が手元に積み上げたる自力善根を捨でゝ。皆ひとしく同く大悲の願船に乘ずる。其乘じ相たに變りはない。皆な共に二種の深心である。高き峯に心地能く咲ける櫻の花と。低き溪の巖角に心淋しく開きし

鬼薊とは。花に上下の變りはあれど。樵夫の斧に掛り繩からげとなるときは同じこと。自力善根を積み上げたる櫻の花の艶見る樣ふな奇麗な善人も。五逆十惡のいがだらけの鬼薊詠むる樣な恐敷き惡人も。高ひ低ひの變りはあれど。弘願の斧にかけられ。佛智の繩からげとなるときは。善人惡人の差別はない。御和讃に『大小聖人ミナナカラ如來ノ弘誓ニ乘スナリ』田地を持つから田地持ち。金を持つから金持。善根持つて善人。惡業持つて惡人と。是れみな持ち物で其名に差別が立つ。其持ち物を捨てゝ丸の裸體

となるときは。更に善惡の差別はない。重き病ひの煩惱を隱して。善人振り仕樣ふと言ふ心ろの繕ひ立てをせすに。十方衆生と御喚び掛けを蒙りたる。在りの儘の本形にて。今日今時只今瞋恚の火手まだおさまらぬ。此の黑煙の中へ我をたのめ助けるぞよ。と御喚び掛け下されたる。彌陀本願の御手柄が。眞心徹到して下され。さてもかゝる徒ら者を。御助けの本願かやと信じ奉る。其一念の信。此の岩擢けても。我が往生は動きませぬと。大丈夫に落ち付きの出來た。此の味じは。いかにも善導大師の御膝元に

在て。直き〳〵御法りを聽聞して居るよーな心持ちがいたします。こう言ふところを。本願の源より汲み取てみますること。因願の文に設我得佛の願と不取正覺の誓ひと。誓願の御顔を立てゝ。三信十念若不生者の三大願事を以て。我等衆生を助けずばおくまいとあるが第十八願の御仕組。そーして見れば此の信も行も往生も。其體南無阿彌陀佛の妙行に攝まります。依て此の南無阿彌陀佛の妙行を。法の眞實として。其南無阿彌陀佛の寶を衆生に廻向せんがために。五乘の機類。餘さず漏らさず。一手に御喚び掛

けに成たが十方衆生の言。此れが機の眞實となります。退いて願成就の文に伺ひ入れば。聞其名號より住不退轉迄の七句二十八字は。本願醍醐の妙藥となり。諸有衆生の一句が。重き病人を喚び出し玉ひた言と腹を据て置いて。そーして觀經を拜見すれば。定善散善造惡と。機類がまち〳〵に分ち玉ひて。そーして觀念両宗を説き玉へども。經の流通に至れば要門自力を廢して。弘願念佛の一法が押立てゝある。爰を一口に申せば。自力の療治法でかなはぬ大病人を。彌陀他力の御療治法に御任せ遊ばす釋尊の御仕

事。然らば三世の諸佛に永不成佛と見捨てられたる大病人の我人は。要門自力の買藥はやめて。本願の病院に入り。院長の彌陀より賜はる六字丸を。信心歡喜と呑み込んで。即得往生の本腹するより外はない。爰が大經觀經二經の要めである。今一つ口傳抄の御文を拜借せば『カヽルアサマシキ三毒煩惱ノ惡機トシテ吾等出離ニ道絶ヘタル機ヲ攝取シ玉ハンカタメノ五劫思惟ノ本願ナルカユヘニタヽ仰イテ佛智ヲ信受スルニ如カス』と在て。三恒河沙の諸佛を泣せた程の手剛き此の奴が定散自力の骨も碎けて。我

身は惡き徒ら者と兩手を付き。かゝる機迄も御助けぞと。深き佛智を深く信じ奉つたが。二種深心と申もの。

第二十三席

『ツミフカク如來ヲタノム』とある。是れを安心上に取て申せば。『フカク』と言ふ文字を。罪と如來との兩方へ通はせて味ふて頂きたい。此の深ひと言ふ字を罪の方へ付けて。罪深くと言へば機の深心となり。又深くと言ふ文字を。如來の方へ寄せて。深く

如來をたのむと言へば。法の深心となる。依て罪と如來との中間に。深ひと言ふ文字一字よりない。此れは機法二種と分れても。深心の體一なりと言ふ證據にもなります。元とより信機信法一具のもので。夫れも別體の一具ではない。同體の一具であると決して置ねばならぬ。先づ此の機の深心は機の眞實に付て立ち。法の深心は法の眞實に付て立つ。現に我身は罪惡生死の凡夫地獄より外に越く可き方もなき奴と。定散自力の刄を捨てゝ必墮無間と膝の折れ場が機の深心の立場である。又乘彼願力定得往生と。

かゝる徒ら者をたやすく助け玉ふは。彌陀如來の本願にて在ますかやと確な佛智を確と信じ奉つたが法の深心の立場である。加樣に申すと。機の深心は地獄行きと。身搆へすることかと申すものもあろふ。そふではない。闇き心ろに手入して。己が根性に磨きを掛け。惡人が善人振りして飛び出しても。自力で行れぬ淨土そと。自力の匙の投げ場が機の深心である。そんなら機を信じてから。御助けを貰ふことか。それでは機の深心が信前となり法の深心が信後と分れて。半自力半他力と成ります。今はそーでな

い。御助け下さるゝ法の御手強さが我が心ろに頂かるゝなり。我身は惡き徒ら者助かる縁も便りもなき者と信ぜられ。其信ぜられた心ろが其儘早や。かゝる機迄でも助け玉へる御佛けは。彌陀一佛ぞと明かに信じたてまつらるゝ。依て機を信ずるも法を信ずるも。共に名號六字の獨り用きゐへ。此の二種深心全く他力の信相と頂ねばならぬ。加樣に骨折て御聞せしても。未來の大事を餘所にして。昔し話しを聞くよふな樂み少ない。聞き方では。其味は分りますまいか。後生大事と蹈みしめて聞て御ろーぜ。指を

以て本願の月を教へ。聲を以て花の在り個を告げ玉ふ。鮮なる御化導の元さに。頂かるゝ了解も又鮮かにして。玲瓏たる月に曇りなきが如く。他力信心には一點の疑ひの曇もなく。爛熳たる花に塵なきが如く。御廻向の佛智に毫も計ひを添へずに頂ひて。且つ美しく喜ばるゝは。釋迦善知識の御化導に。開悟せられた身の仕合と申もの。時に此の觀經の機は漸教廻心の機と申して。聖道門より淨土門に轉入し。要門自力より弘願他力に入らしめ玉ふ經說ゐへ。機の深心は自力の捨て場と成り。法の深心は他力にす

がり場となりて。此れを大經より伺へば。大經は弘願一乘に入る。直入の機なるがゆへに。二種の深心は入用にないと申された學者もある。そーではない。此の二種深心を大經で申さば。顯開智慧段に依て立ちます。それはごー言ふ譯ぞと言へば。因願には信樂。成就の文には信心と在れども。此の因願成就の線路を何程行きつ戻りつしても。信樂信心の色香は分り兼ねます。然し此の顯開智慧段迄來つて上み因願と成就を振り返つてみれば。他力信心の味が分ります。己が胸に手を入れた。闇き心ろの評議をやめて。本願の御助けに夜明けの出來たが他力信心と申すもの。氣船に乘つて仁川の湊に越くに。船は恐ろ敷き大波を割て進行する。其時只耳に聞こゆるは氣笛の聲。身の毛いよだつ涙の音。一寸先きは眞の闇み。只一片の燈臺を力らとして。進むは心ろ淋しいもの。然るに東天に太陽出づれば。昨夜の闇みも去り。涙の音も苦にならず。心ろも落ち付き氣も休んで。賴母敷く仁川の湊に進まれます。今定散自力の氣船に乘り。煩惱の大波を割て。生死の大海を進行せば。愛欲の氣笛は耳を裂き。愚痴の怒濤は胸を打

ち。一寸先きは眞つ闇がり。未來の方角は立たず。只二十願の自力稱名の燈臺を力らこして進むは心ろ淋しい思ひがのかぬ。然るに宿善開發の曙と成り。光明他力の太陽に照されてみれば。無明の闇も忽ち去り。定散に手を入れた。自力の混雜もやみ。善欲さ惡恐しさの血迷ひもなく。かゝる機迄も御助けぞと。身も心ろも落ち付て。露塵ほごも疑ひなきが。明信佛智と說き玉ふ他力信心の味である。そこで不了佛智を嚴しく誡め玉ひて。明信佛智を高く御說き出しに成たが釋尊の御仕事。依て彌陀の佛智は。諸

佛普通の智慧の棹では。測り知ることの出來ぬ。深廣無涯底なる彌陀智願にして。其深き廣き御慈悲の磨き上げが諸佛の匙を投げ玉ひたる。吾人の無明の闇みを破り玉ふところとなる。故に大無量壽經の會座で首座に在る。彌勒大士が五道六道の衆生に合して。汝ち菩薩の行を修して。衆生を化益すれども。今に於て生死の迷ひを離れず。畢竟彌陀の願力によらずんば。本當の光明界へ顏出しは出來ぬぞよと。頭の割れる樣ふに叱られし手前より見れば。他力の眼には自力の功なきことが知れ。謙敬聞奉行と我身

をへりくだり。己が計ひを捨てゝ。深く佛智を信じ奉らるゝ。此れが二種深心と申もの。龍樹天親は愚か。等覺補處の彌勒でも。他力本願に向ふては。永劫修した善根を捨てゝ、佛智不思議にすがり玉ふ。極惡深重の我人は。捨てねばならぬ善根もなきもへ。却て他力に入り易き譯なれば。己が心ろに細工をまじへず。自力雜行に評議をかけず。我身は惡ろき徒ら者と膝折て。本願力にすがり奉れば。高き補處の彌勒も低くき極惡の凡夫も。同一味の信心となります。同じ春風に吹かれて咲く花は。山も里も異なら

ぬ如く。龍樹天親の如き二菩薩の自力を捨てゝ他力に歸する安心も。提婆阿闍世の如き惡逆の人の罪を打出して他力をたのむ信心も。共に二種深心にして更に變りませぬ。

第二十四席

三首の御歌と申せば。仕事が三つ在るよふに聞もれども。根じめは只他力信心の一である。依て第一の御歌には『ヒトタヒモホトケヲタノムコヽロ』第二の御歌には『ツミフカク如來ヲタノム』第三の御歌

には『ノリヲキクミチニコ・ロノサタマレハ』とある。此れみな聞信歡喜の一念。他力信心の了解を御勸め下さるゝより外はない。就中第二の御歌に『ツミフカク如來ヲタノム』とある。此の御言に添ふて御心ろの辿めさせられてあるほゞを御相談に及びますから。昔し物語と聞き流さず。四百餘年前に生れ。中興上人の御膝元を離れぬ心地で聽聞いたされたい。此の『ツミフカク』と言ひかけ玉ひたは。卽ち本願の正所被極惡最下の機を御擧げなされたもので。諸佛如來に御暇の出た我人。九方の淨土を追ひ立てら

れし惡人。後生に付ては。一夜の宿さへ借し手のなき此の奴を御喚ひ出しに成つて。そーして如來をたのむ身になれよと。直ちに第十八願の御殿へ招き寄せ。佛智他力の茵に座らせたいと言ふ。御手厚き御心ろの程を打ち出して『ツミフカク如來ヲタノム身ニナレハ』と仰せられたものである。さて此の極惡最下の機に付て立つ思ひが機の深心。又極善最上の法に付て顯はるゝ思ひが法の深心と言ふものである。今爰を學問の物指話で申して見れば。所信の事に二種あり一には極惡最下の機。二には極善最上の法。

此れを信ずる能信は。只深心の一つである。其信じ相たが二種と分れるので。一には機の深心二には法の深心と。加様に腹の据りを付けて置て。更に進んで光明大師の往生禮讃と散善義と二部の聖教を合せ鏡として。此の二種の深心を伺へば。引きしめて勘定が四つと成る。一には自力無功。二には必墮無間。三には佛願信知。四には乘彼願力と。此の四つの線路を蹈みはづさぬよふに頂かねばならぬ。此の自力無功と匙の投げ場が。必墮無間と膝の折れ場である。底き言ばに言ひおろして見れば。善欲しけれども來

らず。惡遁れんとすれども去らず。無始已來迷ひ來た地金には。瞋恚の角は常に逆立ち。愚痴の鱗は取るにも取れず。無有出離之縁と落るより外に仕方のなき此の身ぞと。自力無功必墮無間と。夢の醒めた場が機の深心。彼の阿彌陀佛は四十八願攝取衆生と。見事に助け得さすほどに。危氣離れて我が本願にすがれよと。喚びかけ玉ふ御慈悲ありだけを。確かと信じ奉り。岩は碎けても我が往生に間違ぬことよと。本願の大道へ眞直ぐに飛び出た。それそこが法の深心の立場である。能く〳〵我が心ろを顧みれば。底

の知れぬほど。淺間敷き極惡深重の徒ら者。無明淵源の病ひにからめられた此の奴を。諸佛如來の病院で自力の療治はさせおけぬと。彌陀本願の大學病院へ。罪惡生死の凡夫よと御喚び寄せになり。他力で療治を仕上げてやろーほどに。早く來ひよと喚び掛け下されたが彌陀の本願。ほんに我身を思へば。身の毛のいよだつほど。恐ろ敷い奴なれども。御喚掛け下されたる。彌陀大悲の御腹の底を汲み得て見れば。善根薄少の自力の丸藥では。きゝめがみへぬほどに。本願醍醐の南無阿彌陀佛の妙藥を呑み込めよ

卽得往生の本腹するぞと。御腹在る彌陀の仰せを。眞直ぐに信じ奉つり。善欲さ惡怖しさの血迷ひなく。かゝるものをと仰せに順がふ一念が。直ちに二種深心となります。依て今一つ細かに組合せて見れば。自力の捨り場が佛願にすがり場。必墮無間と匙の投げ場が乘彼願力と他力に任せ場となります。そんなら此の四つを一々ならべ立てゝ。稽古するのかと言へば。そーではない。此れは元と觀經に說き玉ふ。九品の機類が善惡の二機と分れて。暫らく其上中六品の善人に約して述べ玉ひたが往生禮讃の二種深心。

依つて諸行と念佛と二行相對となる。又下三品の惡人に約して。御聞せ下されたが。散善義の二種深心。是れは本願の上の能被所被相對となる。故に往生禮讃と散善義とは。暫らく深心の相たが變れども。つゞまる所は一致に歸する。墨みは丸き形ち。枝木は長き姿なれども。共に火となるときは。更に變らぬ如く。本願所被の機は善機惡機と分れてあれども。弘願他力に歸するときは。どれほどの善根は在つても自力を捨てゝ他力にすがる一念のとき。自力無功と己が善根は捨てねばならぬ。船に乘り何程棹指しても船の出ぬのは何故ぞ。出ぬも道理こそ。船の纜が岸に維てある。纜を岸に維た儘で棹指ては船の出る筈がない。其纜を切るなり出るなり一念同時。本願他力の船に打乘り。かゝる者をと棹指しても往生一定と心持能く出船にならぬのは。自力の纜が有功の岸に維てあるもへちや。其自力の纜が眞實無功と切れるなり。本願の船は出るなり。一念同時と申もの。彼の最要抄の中に『無始已來生死ニ轉環シテ生死ヲ悕求シ習イタル迷情ノ自力心ニ本願ノ道理ヲ聞タトコロニテ謙敬スレハ心命ノツキルトキニ非サル

オヤ』この玉ひて。曠劫來今日まで。生死の迷ひを離れんものと。心ろをもみかへせども。彌陀本願の不思議に背き。善機好んで惡機を卑しめ。自力定散の計ひが捨たらなんだもへ。迷ひの闇みを出ることがかなはなんだのちや。そこを御和讃に『自力カナハテ流轉セリ』と仰せられました。然るに此の度びは光明名號の御慈悲に養育せられ。宿善目出度開發して見れば。自力無功で在つたと己が心ろに用事のないことになり。偏に佛智他力に助けられてと。心ろの楫の取り直しの出來た塲が。御助けに夜の明け

た一念である。そこが自力の離れ塲。他力にすがり塲。一念同事と申もの。依て自力の捨りたる裏には必墮無間と膝折る味もあり。本願にすがる裏には。他力に任せると言ふ意味も具ります。故に此の自力を捨てると他力にすがることは。箸を二本並べた樣ふなことではない。一枚の膳の裏表と合點して。機を信じ法を信ずる相たこそ二種と分れても。深心の體は只信心の一つである先づ。

第二十五席

此の三首の御歌は。未來へ旅立つ我人の爲には。往生浄土の道中記案内記とも申す可き大切な御歌である。いよ〳〵未來の旅立ちと。我が心ろを押へて見れば『ヒトタヒモホトケヲタノム』此の一念が『マコトノノリニカナフ』と言ふ處『ツミフカク如來ヲタノム』正定不退の身となれば『ノリノチカラニ西ヘコソユケ』となる『ノリヲキクミチニコヽロノサタマレハ』と言ふ決定の信より『南無阿彌陀佛トトナヘコソスレ』と。加樣に頂て見れば。往生如何の血迷ひなく。本願の大道が進れます。そーすれば此

の御歌は慥かに。未來の道中記案内記とも成るべき大切な御歌である。恩知らずの悴が家を飛び出し。臺灣に住居して居る其者に。屆いた親の手紙なら。子たる可き者は讀まずには居られまい。恩知らずの悴とは我人のこと。家を飛び出いたとは。他力本願に背き無宿善の日暮しに喩へ置。屆いた親の手紙とは。取りも直さず此の御文である。帖外帖内合して二百餘通にも及ぶべき。數多き御文は。みな是れ中興上人の御手紙と頂れよ。此の崇なる御文を頂き乍ら。知らぬ顔して居ては濟みますまい。せめて三首

の御歌の御文だけなりとも讀で。何とか御返事申上ねばならぬ。さて此の御歌の眞中に『ツミフカク如來ヲタノム身ニナレハ』とある此の上みの句は辨じ終りましたから。今下の句に移て。御言の中にこも る御心ろのほどを辨じます。爰に『ノリノナカラニ西へコソユケ』とある。此の句も正面より拜めば。必至滅度の益と言ふ迄は治定のこと。然し此の句の裏面に向ひ他力往生と言ふ。物指を當てゝ寸法を取り出せば。『ノリノナカラ』と言ふ御辭が非常に大切なる御辭で。說く者も聞きますものも心ろを爰に留

めて頂ねばならぬ。何故ぞと言へば『ノリノナカラ』と言ふ御辭が。上みの句と下の句とを。しめくゝり他力の目釘を打ち玉ひた御辭となります。卽はち上みの句に『ツミフカク如來ヲタノム身ニナレハ』と今日只今も我が胸底のぞひてみれば。瞋恚の猛火は燃拔き。黑煙捲き上り身振ひするほど恐ろしき此の奴を。我をたのめと攝取の懷ろ開き御喚掛け下さるゝ。其重き佛勅が。此の心ろの据りとなり。本願を信ずる一念に。玉見た樣ふな阿毘跋致の菩薩となるも我が力ではない。法の力であるぞよと。全く他力

の義を顯し玉ふ御辭となります。又下の句に『西へコソユケ』と。聞名信喜の一念より。後念の日立てを詠めて見れば。昔も今も變らぬ。貪欲の泥波何つおさまるか。瞋恚の猛火何つ留るかはてし窮りのない。淺間敷き此の奴が。今地獄向きを轉じて。極樂向きと成たのは。全く我が力ではない『ノリノチカラ』であると他力を顯し玉ひたもの。そーして見れば此の『ノリノチカラ』と言ふ御辭が御歌の中間に在つて。上みの句へ向へば他力信心となり。下の句へ向へば他力往生となる。雙方へ響く大切な御辭で

ある。時に第一の御歌に『ヒトタヒモホトケヲタノム』と。南無歸命を喚び出して。そーして『マコトノノリニカナフ』と結び。又第二の御歌に『ツミフカク如來ヲタノム』と。善惡の機を顧みず。本願の不思議に打ち任せたる。他力信心を喚び出して。そーして『ノリノチカラニ西へコソユケ』と結び玉ひてある。そーすれば『マコトノノリ』とは願力他力と言ふことが分ります。夫れはごーして分かるぞと言へば。此の『ノリノチカラニ西へコソユケ』とあるを。第三首目に受けて信も行も往生も還相もみな

籠る。萬德圓滿の名號を打ち出して。『ノリヲキクミチニコヽロノサタマレハ』と仰せられたで分かる筈づ。依つて第一の御歌に『マコトノノリ』と言ひ。第二に『ノリノチカラ』と言ふ。加樣ふに法り法り法りと。三つ迄并べて。そーして終に『南無阿彌陀佛トトナヘコソスレ』と結ばせられたので。法りとは南無阿彌陀佛のことヽ。此れですつかり分かりましたであらふ。今一つ『ノリ』と言ふ辭を因願に約せば願力他力となり。果上に約せば佛力他力となる。行者の受得に約せば

他力信心となる。依つて願力佛力信力と。其の言ばに變りはあれど。其體は只南無阿彌陀佛より外はない。善欲さに彌陀たのみ。惡怖しさに淨土を願ひて。自力の小路に迷ふた我人が。御手厚き善知識の御化導に手を引かれ。今こそ定散自力の夢醒めて。本願の御助けに廻り逢ひ。宿善開發の夜が明けて。第十八願の大道へ飛び出し。仰ひで本願他力の月を詠め伏しては入大會衆の花を見て。心ろ嬉しく極樂まいりの道中の出來るのは。偏へに『ノリノチカラ』であるぞよと御聞せに成つたもの。又機の善惡の差し

引きにかゝはらず。心ろの出來不出來に關せず。一度び往生を受取りし上なれば。ごれほど煩惱の翼で荒れ廻りても。いかほど惡業の嘴でくるい廻ても。逃げ出すことの出來ぬまでに。御守り下さるゝ由へに。心光照護に御手緩みはなひ。今一つ祖師の御手を拜借せば『願力無窮ニマシマセハ罪業深重モオモカラス佛智無邊ニマシマセハ散亂放逸モステラレス』願力無窮と佛智無邊と。二つを喚び起して。極まりなき彌陀の御慈悲を御知らせになり。罪業深重と散亂放逸の二つを堀出して。限りなき衆生の地金を御

知らせ下され。如何に邪見な我人が。煩惱の手下に指圖して。何程向ふて見ても。打勝つことの出來ぬが。願力無窮の彌陀如來。何程惡業の刄を振立て。ごれ程手向ふても。打ち破ることの出來ぬのが。佛智無邊の親樣。今は早や自力の甲を拔き捨てゝ。吾機は惡き徒ら者。廻心懺悔と降參して。只一筋に彌陀をたのみ奉れば。重き罪も重しとし玉はぬ。深き御慈悲に助けられ。眞實報土の往生。爰が『ノリノチカラ』と他力を顯し玉ひて。『西へコソユケ』と御聞せに成たもの先づ。

第二十六席

此の御歌の中間に『ノリノチカラ』とある。此れは他力を顯す眼目となるべき大切な御言葉へ麁末に伺てはならぬ。さて此の『ツミフカク』と言ひかけ玉ひた處は。本願の正機を喚び出し玉ひた御言で。言換て見れば生れ付きの機地のなり。此の心ろに磨きをかけずと言ふことになる。此の罪を抱へ障を持た儘。如來をたのむ身になるも他力。西へこそゆけど一息々々が地獄向きで在つた此の奴が。極樂向きと

成つたのも他力ぞよと御聞せ下された。そーすれば信心も往生も共に他力の賜物と合點せねばならぬ。他と指すべきものは。衆生より言へば彌陀如來。力とは本願のこと。依て他力とは因位の本願力と果上の攝化力とを指す。別して十二十七の二願で。光明名號を成就し玉ひて。無始曠劫來造り重ねた惡業煩惱を。願力の不思議として。消滅し玉ふと共に。三途の緣を切り。不可稱不可說不可思議の功德の寶を名號に攝めて佛けになるべき手柄を與へ玉ふを他力と申します。時に此の「力」と言ふに付て俱舍論の

智品には佛の十種の力を説き玉ひてある。又大經を拜めば『因力緣力意力願力乃至一切具足』と。三世通達の釋尊すら。百千萬劫説いても説きつくせぬが彌陀の本願力なりと。阿難尊者に御物語り遊ばされた。夫れ程の御力らある。彌陀如來なればこそ。三世十方の諸佛に匙投げられ。提婆に劣ぬ。阿闍世に勝る此の奴を。我れ助けずんばと蹈みこたへ玉ひ。煩惱持つ身が光明放つ佛けとなるまで。世話しおゝそーぞよと立ち向はせられたが大願業力の親樣である。小補韻會の中に『力らとは精神の集まる處を言

ふ』と在て。總へて心ろの寄り集つた處を力らと言ふ。今『ノリノチカラ』とは。彌陀如來の精神一杯寄り集らせられた處を力らと言ふ。如來の精神が何處へ寄り集らせられたかと言へば。此の南無阿彌陀佛の中に寄り集らせられてあります。其精神とは大無量壽經に『如來智惠海深曠無涯底』と。諸佛如來の智惠の棹では計知ることの出來ぬ。願力無窮の彌陀。佛智無邊の如來にて。彼尊は身も心も衆生助けずばおくまいと言ふ。御心ろ一抔御腹ありだけ。打ち込み玉ひたが。此の南無阿彌陀佛である。そーす

れば此の南無阿彌陀佛は。彌陀如來の大慈大悲の凝り固りをへ。此の名號の謂を聞き得るとき。彼尊の御心ろが衆生の心中に徹到して。八萬四千の煩惱の鱗の裏迄。彌陀の御慈悲がしみこみ。必墮無間の此の奴が。必得往生と揖取り直し。たとひ水が燃へ火が流るゝ程の變動があろふとも。如來の御助け一つは間違ぬと。確な本願を確と信じ奉たが。眞實の信心と申もの。今一つ爰に水際立てゝ御相談申度きことがある。夫れは外ではない。他力と言ふに付てのこと。同じ淨土の一門でも西山や鎮西に御沙汰なさ

るゝ他力と。吾眞宗に談ぜらるゝ他力とは。大きに其選を異にしておりまする。先づ西山では佛體卽行を押立てゝ。助け玉へを往生の緣とし。正しく往生の因となるべきば佛體卽我等が往生の行をへ。是れを他力と言ふと談じます。又鎮西は心存助救口稱南無と押立てゝ。心の願と口の行と是れを往生の因と定めて。そーして臨終に至り來迎佛の增上緣に逢ひ奉るが故に是を他力と申します。然るに我が淨土眞宗に談じ玉ふ他力と言ふは。若し因緣の義を以て言へば獲信の因緣と。得生の因緣と。此の二節の御取

扱が在て。高き佛智を低き心へ蒙る方に寄せて申せば名號は因なり光明は縁なり。此の光明の縁に催されて名號の因を賜るゆへ。此れを他力と御決斷遊ばし。又有漏の穢身を此の土に捨てゝ。心ろの乘りし弘誓の船が。恙なく安養界の湊入する方に付て申せば。信心は因なり。光明名號は縁なりと。目の覺めたよふな御決判がある。然れども此の因と縁とは體に二つあるではない。共に以て如來廻向の南無阿彌陀佛の獨り用きである。と御立てになる。爰を分り易く申せば。舟を見て此の舟で此の川が渡れると乘ら

ずして。已に乘つた心地の氣濟が西山の流義。又舟に乘た力らで此の川を渡ると。舟の功を無にして。我が足元を便りにするが鎮西の流義。そこで吾眞宗は乘るも他力なら。渡すも他力なり。共に他力の獨り用きと御聞せになります。大船には乘る機械も。渡す機械も共に具へて居る。渡すばかりが他力でない。又乘るばかりが他力でもない。乘込むも船頭の力で乘り込む。渡すも船頭の力で渡す。そーすれば乘込むも渡すも共に他力である。今彌陀大悲の願船には。乘込む機械が南無の二字。渡す機械が阿彌陀

佛の四字。我れを一心にたのめとは。乘込む機械。必ず救ふべしとは渡す機械。こゝ申す。そんならば乘り込まふと力を入れるもへ。乘せて必ず渡しけると。十劫の昔より我獨りに立ち向はせられたる重き佛勅が。初て聞き開かれ。さてもかゝるものをと乘込む相たが南無歸命。其乘込む一念は我が力ではない。全く乘せての彌陀の力で乘込むもへ。是れを他力と合點せねばならぬ。たのませてたのまれたもふ彌陀なればたのむ心ろも我れとおこらじ。いよ〳〵信の一念に乘りし弘誓の舟が。迷ひの岸を離れてみ

れば。煩惱の波風は荒くとも。難船の愁なきは弘誓の船。臨終捨命の夕には。恙なく安養界の湊入するそこが『ノリノチカラニ西ヘコソユケ』と先づ。

第二十七席

『ノリノチカラニ西ヘコソユケ』とある。此の句の正面に向へば。必至滅度と言ふまでは治定のこと。然し此の句を裏面の方より拜めば。他力往生と言ふ大きな聞きごとが出て來るところで。先づ聖淨二門の綱格より申せば。聖道門は此土入聖得果と立て。

又浄土門は他土得證と談じます。此の瓦礫荆棘の恐ろ敷き此の世界を。卽寂光の浄土として。卽身是佛と膿血流るゝ此の肉體を。其儘三覺圓滿の如來と成ることに骨折るが聖道門。又有漏の穢體を此の土に捨てゝ。無漏の寶國に引き越し。他日彌陀と異なぬ御證りを開せて頂くを浄土門と言ふ。今一つ低き喩に寄せて申せば。軒傾き雨漏る古屋を造作するときは。柱も拔き替へ。天井も張り直し。障子唐紙も入れ替へ。最ふ此れで普請成就と言ふまでは容易のことではない。今煩惱の柱を菩提の柱と替へ。有漏

虛妄の天井も常樂我浄の涅槃と張り替へ。貪欲や瞋恚や愚痴の障子唐紙も。法身般若解脫と取り替へ。最ふ是れで卽身成佛と言ふまでは。三大阿僧祇劫と言ふ。永ひ月日が掛る是れが聖道門。今浄土門は古屋の障子も疊も其塲に捨てゝ。月も花もある新築の別莊へ家移りするが如く。穢身の此の古家は此の土に捨てゝ。本願信じた魂が。御廻向の佛智を抱へ。息切れ眼閉ぢ次第。超諸佛刹最爲精の彌陀の浄土の別莊へ。往生卽成佛の家移をするが浄土門。こゝを先德も三祇を一念に越へると御喜びに成たことであ

る。時に同じ浄土門の中でも。三經の往生と申して。大經觀經彌陀經と此の三部經に付て。往生の仕振が分れて。大經は難思議往生。觀經は雙樹林の往生。彌陀經は難思往生と此の三つに分れて。先づ大經第十八願の往生は。諸善萬行の土産を持て邊地懈慢に足を留る。雙樹林下の往生や。如來の嘉號を巳が善根と廻向して。疑城胎宮に腰を据る難思往生とは。雪と墨とほど違ひのあるのが此の第十八願の往生である。因他力なれば果も又他力で。一念彌陀をたのみたてまつる因も。往生卽成佛の果も。共に他力廻

向の仕立て取りが此の第十八願である。三經往生文類に『念佛往生ノ願因ニヨリテ必至滅度の願果ヲウル』と仰せ遊ばして。諸佛如來に匙投げられた我人を美事に助けずんばおくまいと。他力攝取の誓を立てゝ。我が本願を信じ我が名を稱へよと喚び掛け玉ふ。其誠と心ろを至心に成就し。往生一定と確に落付の出來る智惠を信樂に攝さめ。煩惱妄念の嘴で荒れ廻る此の奴を。諸有群生界を招喚すと。御慈悲の網に打込み玉ひたが欲生我國。此の誓願の御顔を立てゝ。我れ獨りに立ち向はせられた重き佛勅が。初

めて我が胸に頂れたとき。定散自力の夢醒て。かゝるものを御助けの本願かやと。仰ひて佛智をたのみたてまつる。其一念の下に。前へ足の進む正定聚には慶喜のよろこびあり。最ふ手屆きする必至滅度には。深き歡喜のよろこびを持ます。爰を今の三經往生文類で拜見すれば『念佛往生ノ願因ニヨリテ必至滅度ノ願果ヲウル』と御示に成て。眞實の稱名と眞實の信樂と眞實の證果と。此の行信證の三法を往相廻向の一箱に攝めて。近く現生と正定聚の益を得たるものこそ。次如彌勒と讃嘆し玉ひ。更に進んで還

相廻向の一箱を開き。願文及び願生偈の文迄御列ねになり。終りに至て往相も還相も二つ乍ら如來廻向の賜物と御結びなされてある。そーして見れば此の第十八願の往生は臨終と言はず聞信一念の場で定る卽得往生。依て吾祖も御本書の中に乃至一念と言ふ彼の一念と卽得往生とある彼の卽の字とを。同じようにふに釋し玉ひて『一念者斯顯信樂開發時尅之極促』と釋し玉ひて。又『卽言光闡報土眞因決定時尅之極促』と御釋なされてある。今一口に申せは疑ひなく彌陀がたのまるゝなり。時を隔てず念を隔だてず極

樂に往生すべき約束の調ふ手早さを知らしめ玉ひたもの。今一つ言換て見れば信心さだまるとき往生も又定ると言ふ御心ろ。そゝして見れば此の往生と言ふことは。當來の事なれども其往生すべき約束が信の一念の元で調ふ。そこが卽得の二字にある。若し短命にして一聲の念佛口に顯はるゝを待たずして無常の風を引き受け息き其場で絶へたとすれば。往生卽成佛の早業を得さしめ玉ふ。そこが娑婆と淨土の切替場となるところで。不淨の寢間から百寶の蓮臺へまろびいで。高き山の絶頂より低き山を見おろす

如く。超諸佛刹最爲精の彌陀の淨土より。三世諸佛の淨土を一目に見おろす御果報を得せしめ玉ふ。こゝ言ふ末頼母敷き往生の約束が信の一念の元に調へて居る。爰が教主世尊の教に依らば。信心の因も往生の果も南無阿彌陀佛の一箱に攝めて。至心廻向の賜物であると言ふことが願成就の文で頂かれます。今一つ往生の仕振りに付て申してみれば。大經下卷に釋尊藏の扉を開いて見せるが如く『必得超絶去』と『昇道無窮極』と『自然之所牽』と御說き遊ばされてある。吾が高祖大師は。『恩愛ハナハタタチカタ

ク生死ハナハダツキカタシ』と御聞せに成た通で。甚だ離れがたきは恩愛。極めて盡き難きは生死である。其離れ難き恩愛も。盡き難き生死も速かに離れて。息切れ眼閉ぢ次第。左に寢た身が右に寢返りせぬさきに。往生卽成佛の仕合を得させて頂が必得超絶去と申もの。愛着の波に漂ひ名利の山に迷ひ。諸佛の淨土どころか。地獄の廓より外へ顏出しの出來ぬ此の奴を。報法高妙の淨土に往生せしめ。捨てた諸佛にも喜ばれ。樂み極りなき身とし玉ふが昇道無窮極と申もの。念佛申さねばならぬと言ふなかに。

早や煩惱に先駈せられて。淺間敷日暮し仕ても廻向の信に疵付けず。他力自然の淨土の業因たがはずして。彌陀の願力に引かれて。參る淨土へ。往生の一段に危氣ないのが自然之所牽と申もの。そこで銘文には『他力ノ至心信樂ノ業因ノ自然ニヒクトナリ』と目の覺めたよふなる御決斷がある。彼の高瀨川の引き船は。水の流れは激しく下れども。船は後へ戻らず次第〳〵に前に進むのは。船人が肩に手繩を掛けて。ほーいほーいと掛け聲出して引くゆへぢや。生死の川に煩惱の水推しは強けれど往生不定と後戻

りなく。御助け治定と前へ進むのは。彌陀如來の舟人が。攝取の手綱を正覺の肩にかけ。若不生者の掛け聲で引き玉ふもへ。爰が『ノリノチカラニ西ヘコソユケ』先づ。

第二十八席（第參首目）

此の第二首目の御歌に付て。入正定聚と必至滅度と二種深心と他力往生と。此の四つの義筋を以て此の御歌の意ろを辨じましたから。今此の御席より第三首目に移り。『ノリヲキクミチニコヽロノサダマレハ』

とある此の歌の中に含藏せらるゝ。思召しのほどを取出して御相談に及びます。此の座に列せられたる人達は。夢の浮世の昔話しを聞くよふな。樂み少ひ聞きよふしては相成らぬ。曠劫已來の永の迷ひの夢醒めて。玉みたよふな正定聚の菩薩となり。三世十方の諸佛如來に。讃られ守られて。西方の安養淨土へ乘込むともふ。並びなき大事。比ひなき晴れを致そーともふでだちもへ。膝を立て直して聽聞致されよ。扨て此の御歌の上みの句に『ノリヲキクミチニコヽロノサダマレハ』とある。此の『ノリ』と言ふ

御言ばが。一首毎に這入てある。第一に『マコトノノリニ』と。第二に『ノリノナカラ』と。第三に『ノリヲキク』と。加様に三首共に。ノリノリノリと言ふ辭が這入てある。此の法りと指すべき物柄は。何物であるか。初めの歌を拜でも後ちの歌を讀でも次の歌を眺めても。ごーも法りと指すべき物柄が分り兼ねます。然るに初めの歌より次第に句を逐ふてまいると一番終りの處に『南無阿彌陀佛トトナヘコソスレ』。此れで分りましたであろふ。法りとは此の南無阿彌陀佛の六字のことゝ。そーして見れば。法

りを聞く道に心ろの定まればと言ふは。大經願成就の聞其名號信心歡喜の經意を御讀みなされたものと頂ねばならぬ。時に此の『ノリヲキク』と言ふ御辭が。上み下もへ向ふて思召を顯す大切な御辭で。先づ上みに向へば『ヒトタヒモホトケヲタノム』一念歸命の信も。『マコトノノリニカナフ』本願相應の德も『ツミフカク如來ヲタノム』入正定聚も。又『西へコソユケ』とある必至滅度も。其源ごはと押へてみれは。此の『ノリヲキク』と言ふ一言が元とゞで ある。若し此れを下の句へ開けば『南無阿彌陀佛ト

トナヘコソスレ』と上盡一形下至一念で。喜び顔の念佛も悲ひにつけ出づる稱名も。何れが出處ろであるかと言へば。やはり此の『ノリヲキクミチニコヽロノサタマル』と言ふ此の決定の信が源である。爰が信心正因稱名報恩と申ところでも聞信一念の立場に正定聚となる慶喜のよろこびも。佛果の證を開く歡喜もよろこびも。近く信德の元に引き寄せて信心正因と押立て玉ひ。そーして上盡一形の念佛は露命と共に延び行く一念流出の稱名で。皆是れ佛恩報謝であるぞよと御聞せに成つたが此の御歌の御心ろで

ある。吾祖五十二歳の頃。常州稻田の御草庵に於て六十餘部の經論釋を集め玉ひ。御筆を立てさせ玉ふ廣文類に移して申せば。要文類聚遊ばされたるものなれば。其義筋廣しと言へども。其最も要めを摘み出せば。正信念佛の四字に攝まる。是れを最ふ一つ疊めば念佛を正信する信心の一つに結歸致しまする。夫れを今角立てずに「ノリヲキクミチニコヽロノサタマレハ」と御手柔らかに御聞せ下されたもの。其「ノリ」と指すべき物柄は。諸佛淨土に比類なき彌陀如來の大願。限りなき智慧と極りなき慈悲とを以

て。磨き上げ玉ひた南無阿彌陀佛の六字のこと。依てこの法りとは所信の名號をあげ玉ひたもので。此の名號の中には。超世の願も希有の行も。偏く御用意在て。我をたのめ我名を稱へよ。往生の一段は踏はづしはさせぬ程にと御喚掛け遊ばす。爰が行卷の所明となるところ。又『キク』と言ふ文字が。他力信心の目印で。永劫の親となるべき彌陀如來の仰せが。此の貪瞋煩惱の恐敷き心ろの底へ頂かれ。他力信心の玉と成る場には。思ひ切て定散の企を捨てゝ。二た心ろなく如來をたのみたてまつたが。本願を全

領したる他力の大信心と申すもの。爰が信卷上下二卷の御所明と成ります。今一口に疊めば宿善の蕾に定散の疵を付けずに。他力信心の花が咲せたいと言ふ祖師の御心ろ。時に此の聞くと言ふに付て大論の中に二種が在て『聞而不眞受言虛聽聞而信受奉行名眞聽』と在る。加樣に申ても御分りにくひ顏がみへます。今一つ蓮師の御手を拜借せば『無名無實ニキクニアラスヲンコロニコレヲキケ』とあるので分る筈づ。彌陀の招喚が我が耳の元まで來て。我をたのめと仰せらるゝ。其御聲のやまぬうちに。早や聞て

仕舞たと耳に蓋をして。是れで浄土まいりちやと。心の手綱をゆるすよふな聞きよふなら。無名無實の聞きよふとゆふ。今それに反して確かな本願を確かと信じ。兼て企たる定散自力の計ひでは。間に合ぬと打捨てゝ。疑ひも計ひも彌陀の御慈悲にはきこられ。地獄はい出の裸の儘で。御助けに預ることゝ。眞直くに本願の他力を信じて。まめやかに念佛の出て來る人なら。ねんごろにこれを聞き得た人と言はねばならぬ。此のねんごろとは。萬葉集の中に『根の如く』と書てある。成程それに違ない。爰に一本

の大樹があり。其根張りが四方へ廣がり。大根から小根が出でゝ。倒れぬゆへ木の根の張るが如く叮嚀なるをねんごろと言ふ。一口に言へば鬼を佛けにしたまふ本願の手柄を能く聞けと言ふこと。彌陀は因位の本願を成就し玉ひて。無始刼來造りと造る惡業煩惱を引き受け。永く三途の縁を切り。衆生の志願を滿足せしむるほどに。我が本願を信ぜよ。信じ損はさせぬ。我名を稱へよ。稱へ損にはさせぬ。必ず往生は引受け得さすぞよとある佛勅。今迄は此の機が〳〵と。定散諸善の執着より。煩惱を邪魔がり。

覺へのよき人や。話し上手な人を羨みたる。罪福信の大病も。此の勅命の元で平癒して。今は早や胸の出來不出來をながめず。自力定散の手を切て。明き佛智の上に疑ひ晴れたが眞實の信心。今一つ學問の物指話の樣なれども。此の『ノリ』と指すべきものを。所聞に約せば十七願成就の南無阿彌陀佛の妙行となり。此れを能聞に約せば十八願成就の信心と成る。爰が所聞の行來つて能聞の信となり。所信の法轉じて能信の機となる。所謂能所不離機法同一と申す處。仰ぎ見れば流るゝ如き瑠璃の中天に。鏡を磨

き出したるよふな一輪の月。さてもさやけきことよと。眺めつゝ池の水を手に掬すれば。何の間にやら早や我が掌中に。圓き月影を宿し居る。此の月影は全く天より賜物である。仰ぎ見れば超世の悲願たる碧空に。涼き佛智に清き誓を立てゝ。我が本願を信じ我が名を稱へよと喚掛け玉ふ。萬德圓滿の南無阿彌陀佛の明月が。何の間にやら我が胸に持ちたる宿善の水に宿り。往生如何の曇氣なく。御助け一つは間違ぬことよと。慥に信じたてまつた。此大信心の月影は。全く佛智廻向の賜物と喜ばねばならぬ先。

第二十九席

此の御歌の御言に添ふて。其思召のあるところを申してみれば『ノリヲキクミチニコヽロノサタマレハ』とは。聞其名號信心歡喜の事に定めておいて。今一つ上みに遡て見れば『ヒトタヒモホトケヲタノムコヽロコソ』と。又次に『ツミフカク如來ヲタノム身ニナレハ』と。三首の御歌の中で二首までたのむたのむと際立てゝ仰せられ乍ら。第三首目に限てたのむと言はずに。『ノリヲキクミチニコヽロノサタマレ

ハ』と仰せられたは如何と言へば。爰が深き謂の存する處て。ひとたび佛けをたのむ一念歸命も。罪深く如來をたのむ二種深心も。其源とは願成就の文聞其名號信心歡喜に攝るぞと。そこを知らせんがために『ノリヲキクミチニコヽロノサタマレハ』と仰せられたもの。そーして見ればたのむと言ふも信ずると言ふも其言ばに變りは在ても信心の體は一つと頂けます。爰が自問自答の御文では。第四問答の下に在つて『問テイハクカクノコトクニコヽロエサフラフトキハ往生ハ治定ト存シオキサフラフニナニトテ

ワツラハシク信心ヲ具スヘキナント沙汰サフラフハイカヽコヽロヘハンヘルヘキヤ』と。此れまでが問の心ろ。吾眞宗の安心は平生業成の不來迎と正定聚と。此の三つの謂を心得たのが。他力信心の頂れたのであると心得て居りまするに。夫ではたのむがない助け玉へがみへぬ杯と。口喧しく噪ぎ立つるものがある。其邊如何心得ますかと言ふ問の心ろ。其答に『マコトニモテコノタツ子ノム子肝要ナリ』と問の一段をほめ玉ひて『サレハイマノコトクニコヽロエサフラフスカタコソ信心決定ノコヽロニテサフラ

フナリ』と御決斷遊ばされた。此の思召を能く味ふて見られよ。上みの平生業成も不來迎も正定聚も。此の三問答をたヽめば。一念發起と言ふ四字に攝まる。故に上み三問答の下に一念發起と言ふ御言が六邊まで出でヽある。『一念發起平生業成』とも『一念發起住正定聚』とも『一念發起スルトコロニテ攝取不捨ノ光益ニアツカル』とも。かくの如く一念發起々々と。一際目立つ御言遺ひが出てヽある。其一念發起と言ふは『本願ノ我等ヲタスケタマフコトハリヲキヽヒラク』そーして『往生治定トオモヒサタム

ルクラ井ヲ』とある。無量劫の初事に初めて御助けの手強さが聞き開かれ。かゝるものをと御受けの出來た一と思ひが一念發起と申もの。爰を一口に申せば信ずるでは足らぬの。たのむと言はねばならぬ抔と言ふ樣な。理屈の物指話しや。義門の講釋話しはやめよ。聞卽信。是れが他力安心の土臺であるこの御聞せ。今一つ言換て見れば。十方衆生と御喚掛けを蒙りたる。ありの儘の本形にて。今日今時に至る迄。瞋恚の火の手收らぬ。黑煙の上る心の底。貪欲の泥波打上る心の中へ。たのむたすけるほどにと。

攝取の懷ろ開いて喚び掛け玉ふ佛勅が。初めて聞へた一念が直く助け玉への思ひより外はない。そこが一念發起。改邪抄に『男女善惡ノ凡夫ヲハタラカサヌ本形ニテ』とは凡心。『本願ノ不思議ヲ以テ』とは佛心。『生ルヘカラサルモノヲ』とは『必墮無間』生レサセタレハコソ』とは若不生者の誓ひ。凡心に自力の手の離れたのは佛心の貰へた證據。必墮無間と膝折れた塲が。若不生者の御誓ひに滿足の出來た證據である。こゝ頂て見れば。兼て企てたる定散の膳立ては一から十まで失敗で在つたと打捨てゝ。確かな

本願を以て御喚掛け下さるゝ。御聲の方へ向いた場が助け玉への一念である。そこを今此の御歌に『ノリヲキクミチニコヽロノサダマレハ』と仰せられたもの『ノリ』と指すべき物は十七願成就の南無阿彌陀佛。『キク』と言ふ文字が他力信心の目印。『ミチ』とは本願一實の大道『コヽロノサダマレハ』とは決定深心。時に此の御歌の中に『ミチ』と言ふ辭が二箇所に這入てある。初めの御歌に『マコトノノリニカナフミチナレ』又次の御歌に『ノリヲキクミチニコヽロノサダマレハ』と。此の道ち〳〵とあるは。

萬行諸善の小路たる十九二十の願を選で。本願他力の大道たる第十八願を指し玉ひた御言で。十九二十の小路に迷ふた私が。定散自力の夢醒めて。初めて本願の大道へ飛出した。そこが『ノリヲキクミチニコヽロノサダマレハ』と言ふ處。野原を行けば路が二筋ある。如何せんと案じて居る處へ。里人が來たゐへ。是れ幸ひと。若し〳〵一寸と御尋致します。何村へ行くには此の路ゞト行きますかと問へば。あ！御尋ねの村へは。左の路でも行けますが。左の路は細くして橋が幾つも在るから御歳寄りは危ない。

此の右の路を川に添ふて。眞つ直ぐに幸ひ私がそこまで行きますから。御案内しよふと。聞くなりやれ嬉しや大丈夫と。只其人獨りをたよりにもたれた味が一念發起。今日の我人は生死の野原で本願の大道を見失ひ。萬行の小路に踏み迷ひ。如何はせんと案じ煩ふこころへ。心ろの親とたのむ彌陀如來。御慈悲在り丈け打ち出して。十九二十の小路には。懈怠慢惰の橋がある危ない。往生淨土の路は第十八願。若不生者の川筋傳ふて獨り行けではない。此の彌陀が連れ行く程に。我が本願を信じ我が名を稱へよと

呼び掛け玉ふ佛勅が。迷ひし心ろの其中へ。初めて聞へたとき。さてもかゝる者を御助けかやと。脇平むかず餘念なく。一心一向に彌陀一佛に歸する思ひが一念發起。そこが『ノリヲキクミチニコヽロノサタマレハ』と申處先づ。

第三十席

『ノリヲキクミチニコヽロノサタマレハ』とは大經願成就の文の聞其名號信心歡喜の御意ろと腹を据へて置いて。そーして。聞其名號の中には。何なる御

仕組が籠るか。又信心歡喜の下には。どのよふな聞き事が出てゝ來るか。其邊を一つ二つ取り出して御相談に及でみれば。先づ聞其名號を所信とすれば。たのむものを助けると。稱ふるものを助けるとの。二筋の義脈が分れます。又信心歡喜を能信とすると。きは。自力を捨てゝ他力に歸すると。臨終業成を選んで平生業成と言ふ。大きな聞きごとの出でゝ來るところで。加樣ふに申すと。裃付けた樣ふな四角い御話しに成て。定で御婦人方には頂きにくかろー。今一つ言換て見れば。信も行も六字の中に磨き上。

衆生の方には造作をかけず。他力廻向の仕立て取りして。連れ行ふとの御意ろ。其御意ろの聞へた下には。自力善根の土産物も入らなんだと捨てゝ。意の楫を取り直し。一筋に本願他力に。縋り奉たが信心歡喜。其場で娑婆の御暇が出よふとも。往生如何の血迷ひなく。設令ひ天が地となり地が天となる變動が起ろふとも。若不生者の御誓ひに虛はないと。確に往生の一段を。如來の他力に任せたてまつたが平生業成と言ふもの。依て今此の聞其名號の四字を。言ばやさしく「ノリヲキク」と言ひ。信心歡喜の四

字を『ミチニコ、ロノサタマレハ』と御聞せに成たものである。爰を自問自答の御文に照せば。第四問答の下に『イマノコトクニ心得サフラフスカタコソ信心決定ノコ、ロニテサフラフ』と仰せられて。今の如くとは。上みの平生業成不來迎正定聚の三つを一念發起の一箱に攝めて。此の謂の聞へたのが信心決定の心ろであるぞよと御聞せ下されてあります。時に此の自問自答の御文にはたのむと言ふ辭もなく助け玉への言もない。故にたのむが欠ておるとか。いやたのむは入らぬとか。たのまず秘事や法體募の

輩が。口喧く噪ぎ立る處ちや。爰を今一口に申せばたのむと言はずしてたのむこゝろのこもる御勸振り と合點せねばならぬ。何故なれば先づ此の平生業成の問答の下に『本願ノ我等ヲタスケタマフコトハリヲ』とあるが取りも直さず南無阿彌陀佛で所信。又次に『往生治定トオモヒサタムル』とあるが南無彌阿陀佛の謂れが聞開かれた能信。そーすれば本願の法も六字なれば信心の機も六字なり。そこで助け玉ふ如來の本願が丸々我等の胸に全領せられたゆへ。日光來れば忽ち晝となる如く。煩惱を立ち除けるに

は及ばずして。貰ひ得られた本願の儘が直ぐ助け玉への思ひ助け在ませの思ひより餘念はないのぢや。依て此の助け玉への思ひは。ごーして起るかと言へば。今申す如く極りなき智慧と限りなき慈悲とを以て。我等衆生を助けずばおくまいと。立向はせられた其實とが我等の胸へ移り顯はれ其移り顯はれた御助けが。一念同時に向きをかへて。其儘助け玉へとたのむとなるのぢや。爰が全く他力廻向の信相と申もの。加樣に言へばたのみ募りの方は合點が出來ますまい。たのめとあるでたのむ。たのめとないでたのめぬと。成程理屈でこねたらそーでもあろう。然しそれは勘定合て錢足らずの風情ではあるまいか。そー言ふ人達は行信能所機法是一と言ふことを知らざる申し分ぢや。疊の上の水練よりは。實際水の中に落ちたとき助け船に逢て御ろーぜ。たのむのたのまぬのと言ふ世話入らずにたのむより外はない。我等は今生死の海に浮きつ沈みつしておるもの。其ものを助けずんばと。乘り出し玉ひたが彌陀弘願の船である。助け玉ふ御喚聲の聞へた儘が其儘助け玉への思ひである。三世恒沙の諸佛には。毒蛇惡龍と嫌

はれたも道理。積だ善根はなし修した功徳もなく。無始曠劫來心ろに起す貪瞋痴の惑。身口七支に働きし業を持ち。今現に六道の辻にうろつき。煩悩のこもかぶり。惡業の雨晒し。後生こならば取付く島もなく未來こならば寄邊がゝりもなく。此儘命ち終りなば。熱鐵の大地に喰付き。泣より外に仕方のなき此の奴を。我れ助けずんばと。第十八願に若不生者の誓ひをたてゝ。未來の親は此の彌陀ちや。後生の瀬越しは彌陀がする。重き煩悩も深き障も引受け。鱗逆だつ身が光明放つ身となるまで。世話やきおト

そーぞよと肉動き骨鳴る程の御慈悲が。困り果てたる心ろの底へ。初めて聞こへたときは。たのめこないでたのまれませぬと言はりよふか。落る地金へ落こしはせね。助からぬ心ろへ助け得さす程にと。御喚掛け下さるゝ佛勅が眞一文字に聞へてみりやあー尊き御助けかやと疑ひ晴れたる一念が。助け玉へ助けまましませの外に餘念はもてますまい。爰を自問自答に本願の御助けを所信こして。此れに對する能信は。往生治定と思ひ定むる位ひを一念發起と結び玉ひてあるので合點が出來ますであろー。此れでもま

だ。たのめこないでたのめませぬと言ふ人に對して。卑しき喩なれども合點せられよ。爰に深き溪底に落ちたる人在り。岸に昇らんとして。岩角によれば垣は崩るゝ。藤蔓に縋れば蔓は切れる。いよ〳〵水に溺れて死なねばならぬと言ふ處へ。岸に人在つて丈夫な綱を下げ。おゝい助けるぞーと大音で喚べば溪底に落ちたる人は是れを聞き。助けるぞよは有難けれど。たのめこないで縋れませぬと言はるゝか。いはれますまい。其助けるぞ上げるぞよの。喚び聲の聞へた儘が。助け玉へ上げたまへの思ひは自然の發

起である。今生死長夜の溪底に必墮無間と落ち込み。功德善根の岩角や。自力稱名の藤蔓に。何程あはてゝ取り付ても。自力かなはで流轉せり。然るに彌陀如來は無上正覺の岸より。本願名號の綱をさげ。我れ助けずんばおくまいと。喚び掛け玉ふ佛勅が。助かる緣も便りも盡き果てたる心ろの底へ。初めて聞へてみりや。身も心も打忘れ。助け玉への思ひより外はない。依て此の法りを聞く道に心の定れば言ふ。此の句の中へ。ひとたびもほとけをたのむ。罪深く如來をたのむと言ふ迄が。みなこもります先づ。

第三十一席

『ノリヲキクミチニコヽロノサタマル』とあるは。聞其名號信心歡喜の意であると言ふ迄は治定であろふ。時に此の『聞』の一字を吾祖は金玉の如く大切に御取扱ひ遊ばす。夫れは其筈ぢ。法藏菩薩因位の本願を衆生に屆け玉ふには。衆生の耳に聞せて屆けずばおかぬと言ふが本願の成立ちである。何ぜと申せば此の南閻浮提の衆生は。耳根圓通と申して。眼耳鼻舌身意の六根の中で。最も勝れて居るのは耳で

ある。依て衆生の耳に聞せ意ろに納得させて。我が淨土に往生させずばおくまいとあるが彌陀本願の根本である。故に淨土眞實の教たる大無量壽經は上下兩卷に分れてあれども。一部の始終を拜見すれば。聞の一字で始つて。聞の一字で終つてある。先づ上卷の初めに佛說無量壽經卷上と調聲が濟むと。直ちに我聞如是と聞の一字で說き始め玉ひ。そゝして大經下卷の終りに至ると。聞佛所說靡不歡喜と聞の一字で結び玉ひてある。そこで聞の一字が重ひと言ふことを合點せねばならぬ。總じて大經上下二卷に聞

と言ふ字が五十四箇所出でゝある。其中でも聞其名號とか聞我名字とか。名號の謂れを聞けと言ふ所が十七箇所迄出でゝあります。吾眞宗に於て聞の一字を大切になされねばならぬ譯がある。何故と言へば聞くと言ふ立處に助かると言ふ譯のあるが淨土の法門爰を一口に申せば三僧祇百大劫の修行の成じ替へが只聞くと言ふ一字で濟む。そーして見れば鬼が佛けの早や替りは此の聞の一字であります。今一つ言換てみれば。五劫思惟の御智慧も永劫修行の御慈悲も。彌陀の身代ありだけ餘さず漏さず名號の一願に

攝め玉ひ。彌陀と衆生の受渡しが此の聞の一字である。又鬼もはだしで逃げ出すほど恐敷き此の奴が。諸佛も兩手をつきて敬ひ玉ふほど。見事な佛けとなるが聞の一字である。吾祖大師は信卷に『經言聞者衆生聞佛願生起本末無有疑心是曰聞』と。聞の一字に二十字の御釋を施し玉ひて。聞の一字を非常に重く御取扱ひ遊ばさるゝ。時に此の信卷の聞の字の御釋は因位の本願と果上の名號とを具足しての御化導である。然し平生の御化導には。本願を名號に攝めての御化導と。又名號を本願に疊んでの御化導と。

此の二つの御化導が在て。先づ果上の名號を因位の本願に移して御知らせなされた方より申せば。只名號を聞けと言ふたばかりでは。十九の願にも名號あり二十の願にも名號あるゆへ。定散自力の企を持て己が善根を繕ひ。又稱へた功を土産に持出す樣な。不了簡が在てはならぬと思召して。果上の名號を本願の元ゝに戻して。彌陀の本願と申すは生るべからざるものを見事に生れさせ玉ふが横超他力の御手柄であるぞと。果上の名號を本願の上に取て在る。即ち歎異鈔に『彌陀ノ誓願不思議ニ助ケラレマイラセ

テ往生ヲトクルナリト信シテ』とある。今の信卷の御釋では『聞佛願』の三字に當る。今一つ御聞せ下さるゝ筋道を言へば。前の義筋に反して。因位の本願を果上の名號に攝めて御手渡し下さるゝ御化導の御仕振りで。そこが行卷に言南無者を御引き遊ばされて。南無の二字と阿彌陀佛の四字とを判然と分ち玉ひ。そして歸命の御釋に至つて爰を以て歸命と は本願招喚の勅命なりと大經願成就の聞其名號の經意を守らせられて。名號六字を彌陀招喚の勅命にして御聞せ下さるゝが行卷の御釋と成る。そこを今の

信巻の御釈に當つれば『生起本末』とある『末』の字の心ろで。末とは卽ち果上の名號のこと。そしてみれば名號の謂れを聞けと言ふことになる。今一つ言ひ直してみれば。生起とは本願の根起り卽ち衆生助けずばおくまいと言ふ御慈悲心ろ。本とは其御慈悲より五刼に思惟し永刼に修行し玉ひしこと。其思惟と修行に依て出來上りし果上の名號を末と言ふ然らば末とは果上の名號のこと。其名號の謂れを聞て疑ひなきを他力の大信心と御聞せなさるゝ御化導の御仕振りで卽ち和讃に『名號不思議ノ海水ハ逆謗

ノ屍骸モトヽマラス衆惡ノ萬川歸ジヌレハ功德ノウシホニ一味ナリ』と御聞せなされてある。依て中興上人も此の義筋を守らせられて。御文の中に因位の本願を所信とし玉ふことこと。又果上の名號を所信と遊ばすこと。此の二筋の在るのは。全く吾祖大師の御指南を守らせられたものと頂かねばならぬ。そんなら因位の本願を所信となさるゝ處はいづれぞと申せば。卽ち自問自答の御文である『平生ニ彌陀如來ノ本願ノ我等ヲタスケタマフコトハリヲキヽヒラクコトハ』と在て。臨終と言はずに平生と言ひ。名

號と言はずに本願と仰せられたるは。果上の名號の因位の本願に戻して。本願の御助けを所信となさるゝ御化導の御仕振りである。又果上の名號を所信となさるゝが此の御歌である。『ノリヲキクミチニコヽロノサタマレハ』とは。聞其名號信心歡喜で。是れが全く因位の本願を果上の名號に疊込んで。名號六字を所信とし玉ふ御化導の御仕振であると頂かねばならぬ。そーして見れば因位の本願から聞ても。果上の名號から聞ても。因位と果上の變りこそあれ。其體に於ては更にかはりはない。聞き得られたる我

が領解の方へ引きおろしてみれば。一念發起平生業成となります。源平兩家の戰ひの時。三位中將維盛卿の一子六代御前。御歳六歳で在た。北條時政の手に捕はれ。沼津に於て首を刎ね。平家の一門の根を絶んとするとき。母君のなげき家臣のかなしみやるかたなく。賴朝公の兼て親しき文覺上人へ命乞ひをたのまれた。そこで上人北條時政に向ひ。六代の君の命ちを助けられよと逼られたれども。時政仲〳〵聞き入れず。其時文覺上人の申さるゝには。我れ鎌倉に下り。賴朝公に謁し命乞ひして歸るべし。七日

の日延べをせられよと。言を殘して鎌倉に下る。其間の母君の心ろは何かばかり。早や六日七日こなれども。何の便りもない。北條時政是れまでなりと覺悟を極め。六代の君を沼津の濵に引き出し。後ろの方へ廻り刄を振上げたり。暫く待ち玉へと泣て縋る母を撞き飛ばし。義理も情けもあらばこそ。今將に首を刎ねんとするとき。遙か向ふの道筋より。砂烟りを蹴立てゝ走り來るものあり。初めは笠を持つて招きしが。追々近付き聲掛け走せ來る是れこそ文覺上人なり。やあゝ早やまるな。右大將頼朝公の御教

書なるぞ。粗忽して後悔あるな。暫く〳〵と馳付け來り。早くも馬より飛びおり。首に掛けたる教書を開く間も。母君の心ろは大涙小波打ち寄せ碎くる物思ひ。檢視の時政警固の武士。片唾を呑でためろふ中。文覺上人靜づ〳〵と御教書押頂だき。聲高々と三位中將維盛の一子六代死刑に行ふ可きの條勿論の處。文覺法師强ての情けにより助命せしむ。永く文覺の弟子たるべきものなり』と助け得さすぞと聞た る心ろの儘がやれ嬉しやと聲在る方へ振向くばかり爰が一念發起。今極惡深重の我人も。業の手綱にし

ばられて。生死の濱邊に引き出され。無常の刄の元で。必墮無間の打首。兎ても角ても助からぬ此の奴を。善知識の御化導より。彌陀本願の御教書。必ず助け得さすぞの喚び聲が。初めて耳に屆いたとき。やれうれしやと如來の方へ振向くばかり。爰が助け玉への一念。先づ。

第三十二席

『ノリヲキク』とは願成就の文の意ろ。此の聞其名號信心歡喜の八文字は。淨土眞宗を御建立遊ばすに

付て。他力安心の基礎となるべき御大切なる御文である。吾祖御歳五十二歳の頃。常州稲田の御草庵に於せられて。六十餘部の經論釋より。三百餘文を拔き出し。六軸の廣文類御制作遊ばしたも。畢竟此の願成就の文が源である。依て信の卷に『言横超者願成就一實圓滿之眞教眞宗是也』と在て。外に向へば聖道の諸宗に異なり。内に在ては淨土の餘流を選び。獨り一念業成の義を押立て玉ひたが吾祖の御決斷。依つて中興上人も眞宗御再興に當り。御文御制作遊ばされて。聞其名號を所信と極め。善導大師の言南

無者を引き。六字名號を本願の勅命とし玉ひ。又信心歡喜を能信と定めて。天親菩薩の一心歸命を他力の信相として。一念歸命の義を審かに教へ玉ひたもへ。眞宗再興の上人を敬ひ奉ることである。時に御文の御化導を伺へば。六字名號を知らせ玉ふに。四通りの御取扱ひが分れてある。一には六字全く法に約すると。二には六字全く機に約すると。三には南無を阿彌陀佛に疊込み玉ふと。四には阿彌陀佛を南無に攝め玉ふと此の四通りである。此の四通りを一時に御話し仕ては。混雜の恐れを來しますから。此の御席に於て。六字全く法に約すると。六字全く機に約すると。この此の二つを御話に及びます。先づ六字全く法に約するときは。二字も四字も我等を助け玉ふへる法の眞實にして。六字丸乍らが我等を助け玉ふ勅命となる。そこで御文五帖目八通に『南無阿彌陀佛トイフ本願ヲタテマシ〳〵テマヨヒノ衆生ノ一念ニ阿彌陀佛ヲタノミマイラセテモロ〳〵ノ雜行ヲステ、一心一心ニ彌陀ヲタノマン衆生ヲタスケスンハワレ正覺ナラシトチカヒ給ヒテ南無阿彌陀佛トナリマシマス』と。又三帖目五通に『サレハコノ南無阿

彌陀佛ノ體ハ我等ヲ阿彌陀佛ノ助ケ玉ヘル文證ノタメニ御名ヲコノ南無阿彌陀佛ノ六字ニアラハシ給ヘルナリトキコエタリ』と仰せられてあります。此のときは二字と四字と分けずして。南無阿彌陀佛の六字丸乍らが我等を助け玉へる法の行體として御知らせ下されたもの。吾祖の御和讃を頂けば『ノセテカナラスワタシケル』とある。爰を客と船頭に分けて申せば。客は乗り手なり。船頭は渡し手なり。夫れを今は分けずに。乗せ手も船頭なり。渡し手も船頭なりと御聞せに成た。そーすれば乗せ手も彌陀なり。

渡し手も彌陀なり。二字も四字も共に他力の至極を顯はし玉ふところとなる。爰を又の御文で頂てみれば『コノ南無阿彌陀佛ノ六字ノ體ハ阿彌陀佛ノ我等ヲタヌケタマヘルイハレヲコノ南無阿彌陀佛ノ六字ノウチニアラハシタマヘルオンスカタナリ』と仰せられてあるので分る。此れが六字丸乍ら法に約し玉へる御釈と頂かねばならぬ。さて二には此の六字を全く機に約する方から申せば。二字も四字も共に我等が胸に頂いた領解となる。此のときは六字丸乍ら他力廻向の大信心と成ります。そこを御文で出せば

二帖目十通に『一念南無阿彌陀佛ト歸命シタテマツルウチニ』と仰せられ。又二帖目十四通に『サレハ南無阿彌陀佛ト申ス體ハ我等カ他力ノ信心ヲエタルスカタナリ』と。又四帖目六通に『ソレ南無阿彌陀佛トイフハスナハチコレ念佛行者ノ安心ノ體ナリトオモフヘシ』とある。此れ等の御辭は。此の南無阿彌陀佛の行體を直ちに我等の手に握らせて。是れ我〻の安心の體なりとの玉ひた。そーすれば二字も四字も共に我が心ろに頂いてみれば。全く我がものとなる。御一代聞書に『彌陀ヲタノメハ南無阿彌陀佛

ノ主トナルナリ』と御示しなされてある。此れが六字丸乍ら機の方に約し玉へる御釋と頂だかねばならぬ。加樣に伺てみれば六字丸乍ら法に在ては助けると言ふことになり。又六字丸乍ら機に受けられてはたのむと言ふことになる。爰を圓乘院は御助けの外にたのむなし。たのむの外に御助けなしと辯ぜられたは。機法體一の方より辯ぜられたものと存ぜられます。成程機法體一から言へば夫れに違ひない。我等が胸に後生助け玉へと。たのむ心ろのおこりしは。己が勘考や分別で起つてはない。如來の方より助け

得さすぞ。直ちに來れと喚び玉ふ。其御助けの手强さが。我が胸にくゞり顯はれて助け玉へと成る。そ！すれば南無阿彌陀佛を法の方に置けば助けると言ふことになり。又南無阿彌陀佛を機の方に置けばたのむと言ふことになる。此れは法に在てと機に在つてと。其向きが變るばかりで。其體は何れに在ても南無阿彌陀佛の六字である。川岸に舟を寄せ喚び通しにして居ても。客が乘込まねば船の用きは顯れぬ。客が乘込む處で舟のはたらきが顯はるゝ。然し爰に氣を付けねばならぬと言ふは。乘込むも我が力らで

はない。船頭の力ら。渡るも我が力らではない。船頭の力らである。其乘せると言ふ船頭の力らが。乘り手の方に顯れる。爰が御助けの法が轉じてたのむ機となる處。彌陀如來は十劫の昔より川岸へ弘誓の舟を寄せて。佛智不思議の棹を指し。助くる程に直ちに來れと喚び通しにして下されても。迷ひの凡夫がかゝるものをと乘り込まねば。弘誓の舟の用きは顯れぬ。彌陀の喚聲に手を引かれ。かゝるものをと乘り込めはこそ。大悲願船に南無阿彌陀佛の帆を捲上げて。光明の廣海に浮み。臨終捨命の夕には。目

出度浄土の港入が出來ます。船の用きはどこで立つ。客の乘込む一足で立つ。そこで乘せて必らず渡すとあるが法の六字。此の六字が衆生の手に渡つた處を。一念の信なりとも。又我等衆生の後生助け玉へとたのむこゝろなりとも。御知らせ下されたものまつ。

第三十三席

『ノリヲキク』とは。十七願成就の名號の謂れを聞く。こゝ迄は承知の筈づ。然るに御文の上に六字の御販きが四通りある中。六字全く法に約すると。六字全く機に約すると。此の二つは辯じましたから。今此の御席に於て第三第四の二つを御相談に及びます。扨て第三は南無を阿彌陀佛に疊込み玉ふときと。第四は阿彌陀佛を南無に攝し玉ふときと。爰が當流の安心の上に就ては。實に大切な處で。南無に阿彌陀佛が具するもへ二字卽ち六字。又阿彌陀佛に南無が具するもへ四字卽六字と申す聞き事の出て來る處で。爰は畢竟南無阿彌陀佛の名號の上で。法の渡し場と機の受取り場とを分けてみるの御話しで。一名號の中で是れを分けて申すと。先づ南無の二字は機

なり阿彌陀佛の四字は法なり。依て南無の二字を阿彌陀佛の四字に疊込み玉ふときが法の渡し場となる又阿彌陀佛の四字を南無の二字に攝め込み玉ふときが機の受取場となります。元とより機法の二つと分れても別なものではない。機法一體に成就したまいた六字なれば。南無に離れた阿彌陀佛なし。阿彌陀佛に離れた南無もなし。然れども一名號の中で。彌陀の渡し場と衆生の受取場とを分けてみれば。阿彌陀如來の方より我等へ御渡し下さるゝ渡しよふは。南無こたのむべき機を阿彌陀佛の法に疊込んで御渡

し下さるゝ。御文に『阿彌陀佛トイフ四ツノ字ハタノム衆生ヲタスケタマフ法ノカタナリ』と在て。御助けの法の中へたのむ機を取込んで御手渡し下されます。又衆生の方の受取場は阿彌陀佛の四つの字を南無の二字の中へ疊込み玉ふ。依て御文に『南無トイフ二字ハ衆生ノ阿彌陀佛ヲタノミタテマツル機ノカタナリ』と在て。此の時は阿彌陀佛の四字が南無の二字の中へ疊込んで受取場を教へて在る。そーすれば南無の冠りが足らぬの。阿彌陀佛の靴がないのと爭ひは入らぬ。善導大師は二河の譬喩に西岸上に

人在て喚で曰く汝ち一心正念にして直ちに來れ我れ能く汝ちを護らんと岩より堅き誓ひを立て玉ふ。彌陀如來は竪に壽命無量の正覺を御取り遊ばされ。横に盡十方無碍自在の光明を成就し玉ひ。我れを一心にたのめと喚び掛け玉ふは。誰れを目掛けて喚びかけ玉ひたかと申せば。貪瞋水火の難に恐れ。往生不定と案じ煩ふ我人を目掛け玉ひての御喚び聲で。我が本願を信じ。我名を稱へよ。必ず光明無量の益を與へ。當に壽命無量の妙果を得せしむるほどにと。立ち向せられた高き佛勅が。無量刼來迷ひし心の底

を打拔ひて。さてもかゝるものを御助けの本願かやと。聞き開かれた一念の當體が。雜行捨てゝ後生助け玉へと。彌陀をたのみたてまつらねば。機法一體の了解とは言はれまい。依て御文の中に『南無ノ二字ハ衆生ノ阿彌陀佛ヲタノミタテマツル機ノカタナリ』と。爰が衆生の受取場となります。又『阿彌陀佛トイフ四ツノ字ハタノムトコロノ衆生ヲタスケタマフカタノ法ナルカユヘニ』と。爰が彌陀如來の方より渡し場となる。そーすれば二字に離れぬ四字。四字に離れぬ二字。機から言へば二字卽ち六字。法

から言へば四字卽六字となる。何れに在ても南無阿彌陀佛の六字より外はない。今一つ自力他力の水際を立てゝ申せば。自力のたのみは法の御助けを脇へ押除けて。己が願心を押立て。仰ぎ願くば我を迎へ玉へとたのむを向へ。向の返事を聞ねば安心が出來ぬ。他力のたのみは吾が願心を押立つるではない。如來の方より先手をかけて呼び玉ふ。大悲招喚の佛勅へ。其佛勅に御同心申す返事のたのみを向へ。其たのむ一念が卽ち御助けに滿足の出來た。たのみ心ろである。長旅して旅費に盡き。懷中無一物となり。心

淋く道中する處が。爰に一つの大きなる川がある。船でなければ向へ行けず。乘るには錢はなし。其内に日は暮るゝ雨は降る。何とも詮方なし。事情を打明けて。船頭をたのむより外はない。今我人が久遠劫來長の迷ひの旅地にて。善根功德の旅費に盡き。修行戒行の雨具は持たず。煩惱惡業の雨は頻りに降る。末代濁世と日は暮るゝ。生死の大海に差し掛り彌陀弘願の船は在れども。助かるべき緣も便りもなし。仕樣仕方の盡きた處で。どーぞ助けて下されと言ふ樣なたのみ心ろではない。そー言ふたのみなら

皆な自力根性のたのみちや。今他力のたのみはそトではない。我子の歸りの遲きを苦にやみ。今日は來るか今にも戻るかと。待ち焦るゝは親の慈悲。處が我子の顔をちらりと見るなり。オヽ戻つたか迎ひに來た。サア乘れと。川岸へ船を漕ぎ寄する。ヤレ嬉しやたのみもせぬに。船を仕立てゝ迎ひに來たとは。天地に二人となき親の心切と。己れ忘れて乘込むばかり。生死の川岸に迷ひし我人の足元へ。弘願の船を横付けにして。十劫已來待て居るぞよと。御聲の掛かる其下で。さても嬉しや。かゝるものをと。遠

慮離れて乘込む一念が。他力の信相と申すもの。自力の行人は向の岸に維てある船を。喚び戻して乘せて貰ふ樣なたのみ。他力の行人は向の岸でない。早や足元まで漕ぎ寄せて。乘せて渡すと待て在る。其喚び聲の下で大安心で乘込みます。乘込む場所は善知識の言の下。乘込だ處が平生業成。乘込み相たが一心歸命先づ。

第三十四席

「ノリヲキクミナニコヽロノサタヤレハ」と言ふ。

此の歌に就て中興上人の思召を伺へば。曠劫來今日迄迷ひ來た心の病ひを御療治下さるゝが此の御歌である。其御療治法をそろ〳〵べんじて見れば。此の『ノリ』と言ふを。疫癘の御文に照せば。萬德圓滿の名號で。彌陀本願の佛勅となる。『阿彌陀如來ノオホセラレケルヤウハ』と第十八願を直ちに彌陀招喚の勅命とし『末代ノ凡夫罪業深重ノ我等タランモノ』と本願所被の機を喚ひ起しそーして『我ヲ一心ニタノマン衆生ヲハ』とは南無の二字『カナラススクフヘシ』とは阿彌陀佛の四字。加樣に六字の上で二字

と四字とを判然と打ち分け玉ひて。たのむものをたすけると言ふ。此れが卽はち彌陀招喚の勅命であるぞよと御聞せに成つてある。此れはこーして置て。更に自問自答の御文に移れば『平生ニ彌陀如來ノ本願ノ』と言ひかけ玉ひたもへ。我れをたのめと仰せらるゝかと思へば。たのむと言はずして。『我等ヲタスケタマフコトハリヲキヽヒラク』と本願の御助けを所信となされてある。此れは合點の行ぬこと。彼の疫癘の御文では。たのむものを助けると言ふが所信の佛勅となり。此の自問自答では本願の御助けが

所信と成つてある。かくの如く二途の御勸め振りのあるは如何と言へば。爰が實に大切な處で。意業募りや法體募りの病根を拔き玉ふ御療治法で。先づ南無阿彌陀佛の名號を。たのむとたすけると判然二つに分けて勅命となさるゝ方は。十刧秘事の法體募りをして機受安心に曇りなからしめんがための御療治法であります。何故とならば。十刧秘事の法體募りの輩らは。たのむ心ろを押除けて。十刧の昔しに我が往生が定たと。只本願の御助けを向の棚に据へて置き。最早や助かり終つたつもりの空ら喜びで居るが法體募りである。そゝ言ふ輩らは築港の棧橋で大きな滊船を詠め。乘らずして最早や向の岸へ着た積で居る。そゝ言ふ者には。滊船に乘る乘り樣ふを教へてやらねば成らぬ。今も本願弘誓の船を向ふに詠めて早や御助けに預かつた積りで居る。そゝ言ふ者にはたのむものを助けると言ふ彌陀弘願の船ぢやから。早く彌陀をたのめと乘込み樣を教へねばならぬ。十刧久遠の昔しより彌陀觀音大勢至は。弘誓の船を乘り出し生死の海に浮みつゝ。乘せて必ず渡すと喚び玉ふを。乘せて渡す用きは舟の方に在れども。

乘込ねば船の用きは顯れぬ。故に我をたのめたのむものを助けるとは。彌陀弘誓の船に乘込む乘込み樣ふを教へて下されたもの。川岸の船は艪綱ほどいて乘せて渡そふと待て居る如く。彌陀弘誓の船は若不生者の艪綱ほどいて待ち玉ふ。金剛堅固の信心の定るときを待ち得てぞ。此の待ち得てぞとは。何れを待ち玉ふかと言へば。稱へ振りや喜び振りではない。今は信ずるか今はたのむかと。信心決定の時を待ち兼ね玉ふ。其時とは何つぞ。宿善開發の時。かゝる者をと乘込む足元とを待兼ね玉ふ彌陀である。そこ

が第十八願では三信。天親菩薩では一心。蓮師では南無歸命の一念。加樣に申すと又乘込むが大事ちやと。手元に力らを入れて。自力の疵をしては成らぬと思召て。乘せて必ず渡しけると。乘り手の我等には力らは入らぬ。乘せ手の彌陀が骨折り玉ふ。そこが乘せ手の彌陀の力らで乘込むもへ。乘込む相たが全く他力の信相である。是れで十刧秘事の法體募りも。初めて永の迷ひの夢醒て。弘願他力の信相を發起することが出來ますであろー。今一つ自問自答の御文へ移れば。成就の名號を因位の本願へ疊み込ん

で『本願ノ我等ヲタスケタマフコトハリヲキヽヒラク』と在て。爰にはたのむの辭を出さずして。本願の御助けを出し玉ひたのは如何と言へば。是れは又意業運心の自力を拂つて。唯信無疑の安心を知らしめ玉ふ御療治法である。全體意業募りの輩は。たのむと言ふことを取り違へて。己が願心を押立てヽ。如來の御手元へ心ろを運ばせ。繕ひ立てしてたのむ樣に思ふ。眞の闇地に川邊にさしかヽり。向の岸に維て在る舟を喚び戻してたのむ樣な心持で。迷ひの闇地に煩惱の雨風を侵して。助け船を喚び戻してた

のむ樣な心持である。そー言ふ自力運心だのみに落ち入て居るものへ對して。たのめ〳〵と勸めては。尙自力執着の熱度が增す故へ。今はたのめ〳〵と言はずして。本願の不思議を以て。助かる間敷きものを助け玉ふが彌陀如來の御慈悲であると御聞せに成つたもの。加樣に聽聞して見れば。何程自力運心の意業募りのものでも。兼て企たる自力の計ひを捨てヽ。己が心ろに出來不出來にかヽはらず。かヽる者を助け玉ふは。何かなる佛智願力の御不思議そと。眞直ぐに橫超の直道へ飛び出し。二た心ろなく本願

をたのみたてまつるよふになる。喉の渇たときは己が手を以て何程喉を撫でゝ居ても渇きは止らぬ。呑み込む甘露の水一杯で忽ち渇が止まる。たのまねばならぬ信ぜねばならぬと。自力の虚らきばりを以て。何程我が了解を繕ひ立てしも。若存若亡の渇きはとまらぬ。然るに彌陀本願の御助けの甘露の水一杯呑込むばかりで。若存若亡の渇きがとまり。心ろ涼しき佛智の不思議を獲得することが出來ます先づ。

第三十五席

吾高祖大師眞宗御開闢の礎り。一部六軸の廣文類御制作に成り「謹按淨土眞宗」と標榜して他力の底を叩いて御選述遊ばされましたが。今それを大攫みに約むれば。信心正因稱名報恩と言ふ。此の二筋の義脈に收ります。言換て見れば水に畫がくが如き淺薄な繕立をやめて。大盤石の樣なる。本願の約束を信じ。往生如何の苦を離れて。豆やかに念佛せよと言ふことになります。そこを中興上人御承け遊ばされ

て。信心正因と言ふ四角な言で言はずに『ノリヲキクミナニコ、ロノサタマレハ』と御聞せに成つたもの。又稱名報恩と言ふ角ど立ちたる言を用いずに『南無阿彌陀佛ト、ナヘコソスレ』と御手柔かに御聞せ下されたが此の御歌である。さて此の下の句に『南無阿彌陀佛ト、ナヘコソスレ』とある。此れを御自釋の方より伺へば『慶喜金剛ノ信心ノウヘニハ知恩報德ノコ、ロナミヨハンヘリ』と在て。信後の稱名をば佛恩報謝と御聞せに成てある。元と吾高祖大師が信後の念佛をば佛恩報謝であると押立て玉ふは。

龍樹菩薩の易行品に御腹を据り玉ひて。天親菩薩の五念門の行を。信の上の起行とし。道綽禪師の安樂集に出づる智度論の御文を。信卷に御引用遊ばして知恩報德の益の證文となされてある。近く正信偈に『憶念彌陀佛本願自然卽時入必定唯能常稱如來號應報大悲弘誓恩』と仰せられて。疑ひ無く本願を信じ奉つたときが。有漏業の繫縛の切れ塲。麟逆立つ此の體だが玉見た樣な正定聚となり。炎吹き出す此の口から稱へ顯す念佛も。信決定の上の念佛なら。是れ皆な佛恩報謝の念佛であるぞと。夢の醒めた樣な

御決斷であります。往生のために稱へたり。罪消しのために申す自力念佛とは雪と墨とほどの違が在つて。信心決定の上の念佛には。近く慶喜のよろこびと。遠く歡喜のよろこびを持ます。今日我等の日暮から申せば。三惡道に墮落して。無量刧熱鐵の大地に喰付き泣より外に仕樣のなき奴なれども。深き惠みを持ち玉ふ。彌陀如來の御慈悲に追廻され。宿善目出度開發して。聞信歡喜の一念に。平生業成の利益を蒙り。往生一定御助け治定と決着の付いた上なれば。何にの不足在てか往生のためと當がふ樣な

血迷ひ心ろの起る筈がない。只〳〵御助けに預たことの嬉しや。やがて御助けあろふずることの有り難やと。稱へ顯すが佛恩報謝の稱名である。今一つ自問自答の御文に照せば。第五問答の下に『一念ノ信心發得已後ノ念佛テハ自身往生ノ業トハ思フヘカラスタヽヒトヘニ佛恩報盡ノタメト心得ヘラルベキナリ』と仰せられて。そーして終りに臨んで善導和尚の言を引せられ『上盡一形下至一念』と結び玉ひて。一念多念の水際を判然と分ち玉ひてある。此の下至一念とは信心決定の相た。上盡一形とは佛恩報盡の

つとめとなります。蒔た朝顔種は一粒なれども。捨てゝおいたら長き夢と延び行く。他力信心の一粒種を衆生貪瞋煩悩中へ至心廻向と蒔込めば。他力金剛不壊の種ねを得たところ。そこが下至一念と言ふもの。それから報謝稱名の蔓と延び行く。爰が上盡一形の念佛と申すところである。時に一多證文の中に稱名と言ふに付て。二つの御釈が在て。一には佛の御名を口に顯して稱へるもへ稱名と言ふ。二には衡の如くばかり稱へるもへに稱名と言ふ。其稱ふるとは御文に口に稱ふるところの稱名とあり。はかるとは命ち一杯にはかり稱へることで。命ち短ければ。其命ち一杯に稱へ。命ち長ければ長き命ち一杯に量り稱へることで。上盡一形下至十聲一聲とも善導大師は仰せられた。加様に口に顯して稱へるはよけれども。稱へて差上げる様な心持や。借たるものを御返しする様な稱へ方では相濟ぬ。行住座臥口に稱ふる念佛は。助かる間敷き我身を。安く助け玉へるは。何かなる願力の御不思議そこ。仰ひて超世の悲願を尊とみ。伏して横超の直道を喜び。これは〳〵と頭を下げて。只一筋に如來の御慈悲を喜ぶところの佛

恩報謝の稱名と申もの。そんなら稱へる度毎に御恩〳〵と思はねばならぬかと言へばそーではない。信決定の上なれば。うつかり稱へた一聲までが佛恩報謝になるのぢや。彼の蓮如上人山科南殿に在らせられたとき。人が蜂を踏み殺し。思はず知らず南無阿彌陀佛と稱へた。其時蓮師の仰せに。今稱へた念佛は何んと思て稱へたぞと御尋になりました。其時申上らるゝには。いや何とも思はず。只不便やと思て稱へましたと申上られたら。蓮師の仰せに信の上の稱名ならみな佛恩報謝になるぞと御聞せになりまし

た。念佛を稱ふるに付ても。心底より有り難ひときと左程に思はれぬときとある。此れは如何と言へばそれは心の出來不出來にかゝはる話ぢや。朝顔や其日〳〵の花の出來。同じ鉢に咲たる朝顔でさへ。花に出來不出來がある。念佛や其日〳〵の出來不出來。稱へる念佛こそ變らねども。其稱へる己が心に出來不出來がある。同じ一日の内でも。煩惱妄念の噪ぎ立つたときと。少しは妄念も靜まつたときとある。依て喜び心ろに薄ひと厚ひとの變りが出來ます。稱へる手元にかはりはあつても。稱へさせて頂だく

稱名には變りはない。皆な佛恩報謝である。朝起て佛前に座り。心ろ靜かに合掌し禮拜すれば。身毛よだち涙だこばるゝ程尊きゆへ。ほんに今日一日だけなりとも。念佛で日立を仕ましよーぞと。堅く心をきめても。其塲を去れば念佛の出て來ぬさきに。早や煩惱の山が崩れて來て。喜びも立たず念佛も出て來ぬよふになる。そんなら以前ありがたかつた喜こびは何こへやつたか。無くなつたか。消へたか。いや。無くなりはせぬ。消へはせぬ。煩惱の下積に成て居るのぢや。これでは濟ぬと。其煩惱の泥を押除け。妄念の土をはねのけて。御慈悲を取出し引き立て〳〵御恩を喜ばねばならぬ先づ。

第三十六席

宿世の因緣厚くして。淨土眞宗に御流れを汲せて頂き。御座へ出る度毎に。信心正因稱名報恩と言ふことは。誰れしも耳に聞ては居れど。心に會得の出來た方が稀な。夫では體だが淨土眞宗でありながら。心が他門他宗へ逃込で居るも同樣。吾祖は淨土に在して。此の娑婆世界を御覽じて。幾かばかりか御嘆

げき遊ばすであろふ。早く他力眞實の信心を決得して往生一定の身となり。御跡を慕ふて淨土に往生すべき身とならねばならぬ。先づ第十八の願文に向ひ。信と指すべきものは。至心信樂欲生の三信。行と指すべきものは乃至十念と。是迄は皆な承知のこと。處が此の第十八の願文の信は。往生の正因なることは申すまでもなけねども。此の乃至十念と言ふが。何の爲めに誓はせられたものであろうーか。爰が實に大事な處で。此の乃至十念は直ちに因願の文より言へば。往生淨土の正業に。御誓ひ遊ばされたもの

で。我人迷ひの境界を離れて。西方の淨土に往生すべき因に御約束なされたが此乃至十念である。然るに願成就の文迄來て見れば。上み因願の三信が爰では信心歡喜と成り。又若不生者が爰に來つて卽得往生と成て。此の乃至十念の念佛が。何處へやらころりと隱れて見へぬ。其見へぬ處に深き謂がある。そこが信の一念を以て。往生治定の時尅と定め玉ふ。卽ち一念業成と言ふ。大仕事が顯れて來る處である。何となれば聞信一念の立處で。未來出立の用意が濟で。再たび後戻りせぬ不退轉。先きへ足の進む正定

聚。南とも無とも顯れぬ先きに。ころりと命ち終ろふとも。差支無き迄に覺悟の出來た處が。一念業成と申します。其一念業成の上の稱名ならば。幾千聲稱へよふとも。後戻りの念佛は一聲もない。最ふ此の上の稱名は。御恩報謝と喜び申候と。此れ迄來て上み因願の乃至十念を振返てみれば。此の乃至十念は佛の手前では往生の正業と御取り下さるゝけれども。我が機の稱へ心ろは。佛恩報謝の稱名より外はない。同じ淨土の一門でも西山では正因門正行門と分けて。往生の因は還源歸命の一念に定れども。淨

土に九品の差別を分ち。念佛を嵩に稱ふれば。稱ふるほど體内功德の諸行も多く。修すれば修する程。往生が勝れて。最上の者は上品上生の往生が出來ると立て。又鎮西は心存助救口稱南無と立てゝ。心に助け玉へと思ひ。口に南無阿彌陀佛と稱へて。其心と口との二筋繩で。臨終迄助け玉へ南無阿彌陀佛。助け玉へ南無阿彌陀佛と。安堵の思ひ無く。往生の業と募りて稱へる流義である。何れも念佛を往生の業と押付けて申します。然るに吾眞宗はそーでない。一念發起平生業成と談じ玉ひて。短命なものが一生

に一聲稱へた念佛も。長命なものが臨終迄嵩に稱ふる念佛も。共に佛恩報謝の念佛であると御立になり。若し一聲でもよしや半聲でも。往生のためと當がふて稱ふるならば。罪福信をたのむ自力の行人と落ち込んで。他力眞宗を踏み倒し。平生業成の廓を飛出したる。祖師に背中合せの心中と言はねばならぬ。今第十八願の手柄を申せば。たのむ一念の端的に。落ぬ身と成つたが攝取不捨の信ずる信の一念に。まいるべき身と定まつたが正定不退。信心決定の者ならば。たとひ稱へずして。命ち終ろーとも。眞實信

心必具名號と稱へるいはれはこもりてある。命ち延ぶれば自然と多然に及ぶの道理で。爰が罪福信をたのむ念佛行者とは。大いに異なる處である。法りを聞く道に心の定まれば。若存若亡の思ひもなく。善根を羨やむ心もなし。又如來の御助けを危踏む恐れもなく。往生一定の上からは。嬉いに付け悲いに付け。南無阿彌陀佛々々と稱へて。憶念稱名勇み能く進まれます。是れが佛恩報謝の稱名と申もの。爰を自問自答の御文に『一念ノ信心發得已後ノ念佛ヲハ自身往生ノ業トハオモフヘカラス』と外と西鎮二流

に選びをあげ。内ち眞宗の宗義を振ひ起して『タヽヒトヘニ佛恩報謝ノタメトコヽロヘヲルヘキモノナり』と。そーして善導和尚と名乗りをあげて。往生禮讃の御文で結ひ玉ひてある。依つて此の下至一念とは信心決定のこと。久遠刧來迷ふた身に。盡未來際つきせぬ證りを開せ玉ふは。如何なる願力の御不思議ぞと信じた立場に一點の疑ひなきを下至一念と言ふ。又上盡一形とは。上み一形を盡すと言ふことで。吾身を見れば正定不退。彼尊を見れば攝取不捨。逃げだそーとしても。逃げ出すことの出來ぬ迄に御

守り下さるゝとは。さても尊ときことかやと。臨終刹那の夕迄。憶念相續して喜ぶを上盡一形と申ます。思ひ内に在れば色外に顯はるゝの風情で。稱へまいときばつても。御恩が重ければ稱へずには居られまい。申すまいと押へても。御慈悲が深ければ申さずには居られまい。家主の嫁が借屋住ひの老婆の處へ内證で牡丹餅三つ程紙に包み。此れは内の姑に隱して持つて來た程に。必ず姑に禮を言ふて下さるなと止めて置た。其後ち此の老婆が家主の宅へ行けば。姑と嫁と二人併で居る。嫁の顏みて先日は彼の牡丹

と言かけたので。嫁は驚てオイお婆さん。牡丹とは何ちやへと言へば。老婆も氣が付てハイ坊さんは御留主で御座いますかと言ふた。坊は爰に居るが見へぬかへと姑がいゝますとオヽほんに御機嫌能ふて御目出度ふと言て。早々逃げて歸つた。夫から四五日立て又出て來ました。同じく姑と嫁と居る。先日は彼のボーと言ひかけてフト氣が付き。棒一本借して下されと紛らかして。入りもせぬ棒を借りて來たと言ふ話しがある。禮を言て呉れるな。言ひますまいと約束して在ても。牡丹餅貰つた嬉しさに。顔見る

度毎に禮を言はずには居られまい。御慈悲貰ふた嬉しさに寐ても覺めても隔てなく南無阿彌陀佛々々と稱へずには居られまい。

第三十七席

さて信後の念佛に付て。御相談に及びかけましたが。大體此の念佛と言ふは。因願の御文に。乃至十念と在て。往生の正業に誓ひ玉ひたが本源である。然し成就の文まで來て龍樹菩薩の御指南を守れば。信決定の上の念佛は。佛恩報謝の念佛となります。今一

つ極めて御相談申したきは。彼の善導元祖の上に在ては。佛恩報謝と言ふことないでは無けねども。信後の念佛を正定業と御取扱ひ遊ばす。又吾祖の上に來ては。念佛は正定業なることは。勿論なれども。信後の念佛をば佛恩報謝と押立て玉ふ。此の相違のあるは如何と申せば。是れは非常に重き御話であるから。一同心ろを靜めて聽聞致されたい。先づ善導元祖は念佛を正定業と御名けなされたのは。念佛の行體に付て御名けなされたので。此れには本願選定業と往生決定業との二筋道を以て伺はねばならぬ。

法に在ても機に在ても。念佛の行體は正定業と言はねばならぬ。先づ選定業と言ふは。選はるらぶ定はさだめると言ふ文字で。彌陀因位の御定めの行と言ふこと。母親が吳服屋に行き。此の反物は好いとか此の反物は惡いとか。選ぶことを選と言ふ。そして惡い反物を選び除けて。好い反物を選び取つて。此の反物ならば我子の體らだに好く似付くやうへ。此の反物にしましよーと。選び定めたが選定業。今根機劣くして行業おろそかな我人。罪深く障り重き此の奴を。我れ獨り助けずんばと誓願の御顔を立てゝ。

諸佛淨土の因行たる諸善萬行は衆生の根機に不相應と選び捨てゝ。衆生の根機に相應するは。只此の南無阿彌陀佛の一行なりと選び玉ひて。此の念佛を與へて。我が淨土に往生させずばおくまいと。堅く御定め下された念佛也へ。是れを選定業と申します。又決定業とは。決は決斷。定は治定の義で。萬德圓滿の南無阿彌陀佛を。善知識の御化導より。御聞せに預り。いよ〳〵かゝる徒づら者を助け玉へるは彌陀一佛ぞと。疑ひなく本願を信じ。往生如何の氣懸なく。念佛往生は元より御誓ひの行なれば。ひよつ

こしたらでない。慥かに御助けは間違はぬことゝ信じ奉つり。岩は碎けても此の信一つは狂ひませぬと。心ろ丈夫に念佛の出來るのを決定業と申します。爰を元祖は決定と思へば決定不定と思へば不定と仰せられて。かゝる罪深きものは。往生如何であらふと危蹈むよふな不定の思ひなら。元とより往生は不定なり。本願の不思議を以て必ず往生せしめ下さるゝと決定の思ひに住するものなれば必ず往生は決定なり。爰が決定業の念佛と言ふ處ぢや。我家を發足するとき必ず京都へ參ると。瀘車に乘込めば容易く京

都参りが出來る。夫れがこんな病足では往けるやら往けぬやらと言ふよふな不定の足を。引きづりて出でかくれば幾足あゐんでも不定ではあるまいか。依て善導元祖は信後の念佛を。正定業と仰せられたのは所行の體に付てのこと。所行の體に付て言へば。法に在ても機に在ても。行體に於ては更に變りはない。是皆な正定業の念佛である。又吾祖が信後の念佛を。佛恩報謝と御勸めなさるゝは。念佛の行體に付てのことではない。此れは能行の念想に約しての仰せごと。今一つ言ひ換へてみれば念佛を稱へる已が心

持ちに付てのこと。已が稱へる稱へ心ろは佛恩報謝であるぞ。佛恩報盡の念佛であるぞと御聞せになりましたもの。若し稱へる念佛を。廣大な佛力他力の御心をも汲み得ず。往生の業と募りはせぬが。稱へた功力で參ろふと。企はせぬかと。他人の及ばぬ處迄。御手を入れての御親切。一口に申せば念佛の行者は彌陀の獨り子ゐへ。定散の疵がさせともないとの御意ろ。兎角捨り兼ねたは定散自力。持出し根性のやまぬは凡夫の自性。其自力の企を捨てさせ。他力本願に歸せしめて。肩の荷おろした念佛が。稱へ

させたいと言ふが。吾祖の御腹である。月觀にはランプの用意は入らぬ。螢狩には灯燈は無用。他力本願の月觀や。佛智廻向の螢狩には。定散自力の持出し根性は更に無用と捨てゝ。只偏へに佛智の不思議を信じ奉つり御恩尊や南無阿彌陀佛と稱へましよーぞ。爰に一際立てゝ御相談申し置ねばならぬと言ふは。二行廢立の御勸め振りである。此の二行廢立と申すは。諸行と念佛と相對して。諸行は捨てもの なり念佛は取りものなりと教へ玉ふ。爰に木綿の反物と絹地の反物と在る。此の品何れを取るかとせば

木綿の反物よりは絹地の反物なりと教へねばならぬ如く。今諸行と念佛と二行并べて。此の行何れを取るかと言へば。諸行を捨てゝ念佛せよ。此の念佛こそ。選擇本願の正定業たる。稱名念佛であるぞと教へ玉ふ。然し其正定業たる稱名念佛を。心得違ひして往生淨土の業因であると。自力の策勵を持つ者に對しては。成程稱ふる念佛の體は元とより正定業なれども。己が稱ふる自力の功立を捨てゝ。他力本願に歸すべしと勸めねばなるまい。覺師の御言に『正定業タル稱名念佛ヲモテ往生淨土ノ正因トハカラヒ

ツノルスラチヲモテ凡夫自力ノ企ナレハ報土往生スヘカラス』と誡め玉ひてある。此の着物を着るならば只の着物と思ふて着てはならぬ。着るなら親の親切を着よ。親の親切とは。此の着物を仕立上げる迄の親の苦勞は何かばかりと。親の心ろを頂いて着ねばならぬ。念佛稱へるなら。只の念佛と輕く心得ずに。此の念佛を成就し玉ひて。我等を助け玉ふ迄の如來の御苦勞は何かばかりぞと。仰ひて超世の悲願を尊み。伏して横超の直道を喜ぶこころの。佛恩報謝の念佛であるぞよと教へ玉ひたが吾祖の御化導で

ある先づ。

第三十八席

續て聽聞に及ぶ。善導元祖は念佛を正定業の一邊に取り。佛恩報謝を拂ひ玉ふ樣に心得ては濟ぬ。往生禮讃に心々相續して阿彌陀佛の恩を念ぜざるは雜修の失なりと在て。舟にも丘にも積れぬ程の御恩を蒙り乍ら。御恩を御恩と知らぬやつは。親樣に背中を向けた不孝者ちやと御誡なされた御言である。又元祖も和語灯錄に將に佛恩を念じて報盡を期として常

に思ふ可しと在て。短ひ壽命で長き御恩は報じ盡きぬ由へ。心の綱を許さずせめては〳〵と鞭當てゝ。佛恩の稱名を勵めよやと御知らせなされた。彼の三位基親卿より。念佛の稱へ心ろに付て御尋ねなされたことがある。上人の御坊一日に七萬邊づゝ御稱へ遊ばすが。此の基親も數多く稱へ申候。基親は佛恩報盡の爲めに稱へます。師の御坊如何と御尋に成た其時元祖の御答に。愚意の所存に違はず深く隨喜し奉つり候と御答へなされました。そーしてみれば善導も元祖も念佛の行體こそ正定業なれ。其稱へ意へ

這入れば。助かる間敷き身を。安く助け玉へる御恩の嬉しさの餘り御稱へ遊ばされたことである。此れで念佛の稱へ意は佛恩報謝と言ふことが御分りに成たであろー扨て又高祖大師と言へども。念佛の行體は正定業なることは。正信偈并に銘文の上で分ります。然も其正定業たる稱名念佛を以て往生淨土の業因と計らひ募る。自力の病ひを療治して御恩尊や南無阿彌陀佛と。後生の苦拔けの出來た念佛が稱へさせたいと言ふ祖師の御意である。そんなら信後の念佛を佛恩報謝と押立て玉ふは。經論釋何れに據あり

やと申せば。近く龍樹菩薩の易行品に出でゝ。遠く釋尊の經意を探り。佛恩報謝の稱名と押立て玉ふが眞宗の御定判である。今一つ思ひ切て其源を出せば。因願の文の乃至十念是である。こゝ申すと合點の行ぬ顏付が見へます。限りなき智惠と極まりなき慈悲とを持ち玉ふ彌陀如來が第十八願に佛恩報謝を誓ひ玉ふ道理が無いと。難せらるゝであろゝ爰を能く聞かねばならぬ。第十八願の乃至十念は。佛恩報謝に誓ひ玉ひたものではない。我等が往生の正業に誓ひ玉ひたが此の乃至十念である。然れども其乃至十念

の行業を善知識の口より傳へ聞かしめ玉ふ時。信心歡喜の一念に我物とすれば。乃至十念の念佛を稱ふる。他力信心の行者の手前では。其思ひ振りは佛恩報謝となるのであります。爰を高倉學寮の相傳に第十八願に佛恩報謝の念佛誓ひて在りやと人間はゞ。否な誓てないと答ふべし。又人在て佛恩報謝の念佛申しなば第十八願に契ふやと問はゞ。何にも契ふと答ふべし。是れが高倉講堂の相傳であります。成程諸佛淨土に比類なき。超世無上の誓願と言ふべき。彌陀の本願に。佛恩報謝の誓ひを立てゝ。助け玉ふ

樣ふな他人佛けの彌陀ではない。此の乃至十念の念佛は。何かにも衆生往生の正業に誓せられたもので。言ひ換てみれば修行戒行に手足をぬらさず。地獄はいでの此の奴に。此儘直ちに正定業の念佛を持せ。我が淨土に迎へ取らずばおくまいと言ふ御誓ひである。そんなら報謝の念佛は。第十八願の乃至十念とは違ふかと言へば。やはり一つである。一口に申せば彌陀の手元では淨土に迎へ取るがための乃至十念。我等が貰へば夫れが直ちに佛恩報謝となるのぢや。我子が京都へ參るとき。親から貰ふた一包の金。其

金は御禮の土産物を買せるためではない。樂しく京都參りがさせたいと言ふ路金に當へたが親の心ろである。然るに息子が京都より歸るとき。親へせめてもの御禮心ろより。扇子の一本も土産に買て戻る。其金はやはり親から貰ふた一包の金が元である。今第十八願の乃至十念は。淨土往生の正業で。極樂まいりの因ねぞよと。往生の路金に誓はせられたが此の乃至十念。此の乃至十念を信の一念にこめて受取り。其受取た乃至十念を以て。直ちに彌陀に向へばごーであろふ。往生は信の一念にきめて頂だいた

こすれば往生の正定業と思ふ筈づはない。唯御禮報謝の思ひより外はあるまい。息子が土産を買て戻るのも。親より貰ひし一包の金が元と。我等が佛恩報謝の稱名となへるも。彌陀から貰ひ得た他力廻向の一包が元と。親を親と思ひ。たとひ一本の扇子でも買て戻れば。親は其志のほどを受けて喜ぶ如く。御恩が御恩と知られたら。只一聲半聲の念佛でも稱ふれば。親樣は御聞きはづしなく。聞こしめして御喜び遊ばすもへ。佛恩の稱名が本願の意ろに契ふと言ふことになります先づ。

第三十九席

骨に不足なき六十三軒の傘も。轆轤一つが要め。淨土論の五念門も散善義の五種正行も。畢竟此れを攝めてみれば。稱名念佛の一行となる。依て此の稱名念佛は所行の體から申せば正定業。又能行の念想から言へば佛恩報謝と言ふことは。前席で御分りに成た筈づ。然し念佛と言はゞ皆な正定業とは申されぬ。眞門自力の念佛在り。弘願他力の念佛在り。今は第十八願の念佛こそ。眞の正定業の念佛と申します。

其筋目を分けてみれば。諸行幷〳〵に見て萬行隨一として稱へる十九の願の念佛や。又念佛一行と成つても是こそ大善根大功德なり。是こそ正定業なりと能稱の功を募る二十の願の念佛は。何程稱へても自力の心を運ぶ念佛なれば。若存若亡の病ひが拔ぬゐへ眞の正定業の念佛とは言れぬ。獨り第十八願の念佛は。往生不定の病氣拔きして。稱へ顯す念佛ゐへ。是れを正定業の念佛と御取扱ひになるが。吾眞宗の御定判で在る。其第十八願の念佛とは。聞信歡喜の一念に。心光照護の益を蒙り。諸佛に譽られ菩薩に

護られ。其場で命ち終らうとも。往生卽ち成佛の仕合を得せしめ玉ふ。其嬉しさの餘りに稱へ顯す念佛で。是れが眞との正定業の念佛と申もの。黑煙捲き上る程。恐敷き心ろの中へ。御廻向に預つた他力の信は。五刼の間だ胸を焦し玉ひし。彌陀の御智惠の固り。炎を吹き出す口に。稱へ顯す念佛は。永刼御身を碎き玉ひし。彌陀の御慈悲の固り。其量りなき智惠。極りなき慈悲は。何より出來たぞと言へば。阿彌陀如來の我身を捨てゝ。衆生を救はんとの淸淨願心の實と心ろが體。依て此の智惠も慈悲も眞實も。

此の三つの磨き上げが。南無阿彌陀佛と成らせられた。夫れを如何して頂だくかと言へば。諸佛中の王光明中の極尊たる彌陀如來より。我を一心にたのめ必す救ふべしと。重き佛勅を蒙りたる下に。餘佛餘菩薩を念ぜず。餘行餘善を顧みる餘地も無く。堅き御誓ひ在せばこそ。かゝる徒ら者迄も御助けぞと。佛願の不思議に歸託した處が眞實の信。心の乘りし弘誓の船が安養界の港入するまで。喜び〳〵御恩報謝として念佛するのが眞實の行。そーしてみれば眞實信が上の稱名なればこそ。定散自力の危な〳〵の

落付のない。稱名とは天地の相違がなければならぬ。此の眞實信の上の稱名は。往生に危蹈み心ろもなく。御助けに曇氣もない。夫れは其筈づ。爲物大悲の親樣は。我等の心に出來不出來はあろふとも。そこは浮世の常と見遁し玉ひて。攝取に御手許みのなき御守りがあるを。心ろ丈夫に念佛が出來ますであろトそこを中興上人の御言に「一念ヲ以テハ往生治定ノ時尅ト定メソノトキノ命ナノブレバ自然ト多念ニ及ブノ道理ナリ」と御聞せに成て。一念發起の場所が。弘誓の船の乘り場。其時の命ち延ぶれば。自然

と多念に及ぶことは。信の一念に乗りし弘誓の船が。煩悩の大波を割つゝ進み。詠めも清き光明界の港に付く迄。念佛稱ふる相を仰られたものそーして終の結び止めに「コレニヨリテ平生ノトキ一念往生治定ノ上ノ佛恩報盡ノ多念ノ稱名トナラフトコロナリ」と信心正因稱名報恩の義脈を御相承遊ばされた。爰が見眞大師の御流義に限る處。時に此の御歌に『南無阿彌陀佛トトナヘコソスレ』とある。御自釋の方では「知恩報德」と在り。又自問自答の御文には「佛恩報謝」と有る。何れにもせよ此の御恩と言ふこ

とは。如何なる御恩かと申せば。是れは佛の智斷恩の三德の中の恩德なることは無論なれども。今爰に智恩とある恩德は。超世不具の彌陀大悲の恩德のことで。爰を御文には『雨山ノ御恩コオムリタル身ナレハ』とある。雨山の御恩とは數も限りもなき彌陀如來の大恩のこと。そこを早分りに申せば。佛智より他力の信を廻向し玉ひた恩德と又願力の不思議として。佛の方より往生を定め玉ひし恩德と。此の二つに攝ります。此の廣大なる恩德を報ずるには。如何して報じましよふぞ。彼の法華經の藥王菩薩は。

佛に依て一切變現色身三昧を得玉ひた。此の佛恩を報ぜんがために。千載の間だ身を燒て佛を供養せられたこともある。そーしてみれば。我等も彌陀の大恩を報ずるには。百千の身命を捨てゝ報ぜねばならぬのに。今は只聲に出して南無阿彌陀佛〳〵と稱ふる計りで佛恩が報ぜらるゝことは何と根機にかなふた本願ではないか。御式文の中に『觀音大士頂上安二本師彌陀一大聖慈尊寶冠戴二釋迦舍利一縱經二萬劫一亘レ報二一端一不レ如二念名願一順二彼本懷一』ともある。千劫は愚か萬劫を經と言ども報じ盡すことの出來ぬ御恩を報ずるには。只

本願相應の念佛に如かず。手短かに申せば稱へ心ろを用立せずに。他力の獨立をする。念佛で日暮しせよと言ふこと。何程青筋立てゝ念佛稱へても。本願不相應の念佛なら。佛恩報謝にはならぬ。本願に相應したる念佛なればこそ。あくびまじりの半聲までが佛恩報謝に成る。御一代聞書に『蓮如上人仰セラレ候信ノウヘハ尊ク思ヒテ申ス念佛モ又フト申ス念佛モ佛恩ニ備ルナリ』と。夫れは其筈つ。彌陀如來は御無理なことは仰せられぬ。我等が心ろに貯へ置きし古き雜行を捨てさせ。新しく念佛の一行を持せ

て。浄土に連れ行ふと言ふ御意ろ。そーしてみれば誠を誠と信じて念佛するのが。親様の心ろにかない ます。今一つ元祖の御言ばを拝借せば『去レハ阿彌陀如來ハ我名ヲ稱フルモノヤアリケント御耳ヲカタケテコレヲキヽ我カ浄土ニマイルモノヤアリケント御目ヲマジロマシテコレヲ見玉フ』と仰せられて。今は本願を信じて呉れるかと。常恒不斷我等を憶念し玉ふに。稱名念佛の聲の出様の遲きを御覽なされて。さても言甲斐なきものかなと御恨み遊ばす程に。稱名念佛に懈怠してはならぬぞとの御聞せ。皚々た

る雪の中にポツチリと咲たる梅の花。何れが花か雪か。見分け付きがたけれど。花の咲たる證據には馥郁たる薫りが來る。鶯の法々華經と初音を顯はさば。聞人皆な耳を聳てますであろゝ煩惱の雪の中に他力信心の花咲けば。何れが煩惱の雪か信心の花か。一向見分け難けれども。信心の花の咲たる印には慶喜歡喜の薫りが浮び。初音顯す鶯の様に。聲立てゝ南無阿彌陀佛と稱へ上ぐれば。釋迦彌陀諸佛共に。御耳を傾けて聞こしめす先づ。